佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 276 集

宮の上遺跡群

宮 の 上 遺 跡 Ⅶ

長野県佐久市三河田 宮の上遺跡Ⅶ発掘調査報告書

２０２１．３

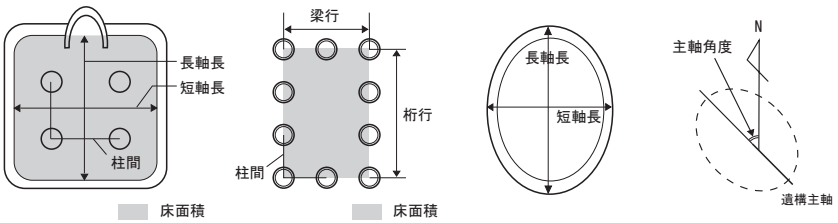
佐久市教育委員会

例　言

1　本書は株式会社シナノによる工場新築工事に伴う宮の上遺跡Ⅶの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　　株式会社シナノ
3　調査主体者　　佐久市教育委員会
4　遺跡名及び所在地　宮の上遺跡群　宮の上遺跡Ⅶ　（YMMⅦ）
　　長野県佐久市三河田字柳原 320-1
5　調査期間及び面積　発掘調査期間：令和元年 8 月 19 日～令和元年 9 月 25 日
　　整理作業期間：令和元年 9 月 26 日～令和 3 年 3 月　　日
　　面積：790.20 ㎡
6　調査担当者　久保　浩一郎
7　本書の編集・執筆は久保が行った。
8　本調査において出土した遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構の略称は以下のとおりである。
　　H－竪穴住居址　F－掘立柱建物址　D－土坑　M－溝址　P－ピット
2　遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
3　遺構の計測値は以下の値である。



4　スクリーントーンの表示は以下のとおりである。

5　遺物の実測図番号と写真番号は対応し、特に記載のないものは縮尺 1/4 で掲載した。
6　本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
7　遺物観察表における（　）は推定値を、〈　〉は残存値を示す。
8　第 1 図は、地理院タイルの色別標高図及び陰影起伏図、国土数値情報（行政区域データ）を基に作成し、第 2 図は、国土地理院の基盤地図情報（基本項目データ）と国土数値情報（河川データ）を基に作成した。

目次

例言
凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過　・・・・・ 1
　第 1 節　発掘調査の経緯　・・・・ 1
　第 2 節　調査組織　・・・・・・・・ 1
　第 3 節　調査日誌　・・・・・・・・ 1
　第 4 節　遺構・遺物の概要　・・・ 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　・・・・・ 2
　第 1 節　地理的環境　・・・・・・・ 2
　第 2 節　歴史的環境　・・・・・・・ 3
　第 3 節　基本層序　・・・・・・・・ 3
第Ⅲ章　遺構と遺物　・・・・・・・・ 5
写真図版

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査の経緯

宮の上遺跡群は、佐久市北部中央の三河田・横和地籍に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である（第１図）。北側の湯川と、南側の千曲川及び滑津川に挟まれた東西に伸びる台地上に立地し、標高 769m を測る。

今回、遺跡内で株式会社シナノによる工場新築工事が計画されたことにより、遺構の確認調査を令和元年７月８日～ 10 日に実施した。その結果、 平安時代の竪穴住居址等が確認された。保護協議の結果、建物直下の遺構について、記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

第２節　調査組織

調査主体者

佐久市教育委員会	教育長　棚澤　晴樹
事　務　局	
社会教育部長	青木　源（令和元年度）　三浦　一浩（令和２年度）
文化振興課長	東城　洋
文化振興課企画幹	吉田　晃（令和元年度）　岡部　政也（令和２年度）
文化財調査係長	山本　秀典
文化財調査係	小林 眞寿　冨沢 一明　上原 学　羽毛田 卓也 久保 浩一郎（～令和元年 11、令和２年４月～）
調査担当者	久保 浩一郎
調査員	赤羽根 篤　赤羽根 充江　浅沼 勝男　大矢 志慕　木内 修一　清水 律子 田中 ひさ子　中澤　登　羽毛田 利明　橋詰 勝子　橋詰 信子 比田井 久美子　柳澤 孝子　横尾 敏雄　依田 好行

第３節　調査日誌

令和元年度	
６月５日	株式会社シナノより土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出を受理。
７月８日～ 10 日	対象地内で遺構の確認調査を実施し、竪穴住居址等確認する。
８月 19 日～９月 25 日	工場建物直下 790.2 ㎡について、記録保存のための本調査を実施する。
９月 26 日～３月 31 日	出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書作成作業を行う。
令和２年度	
４月１日～	出土遺物の整理作業及び発掘調査報告書作成作業を行う。
３月	発掘調査報告書を刊行し、業務を終了する。

第４節　遺構・遺物の概要

遺構　　竪穴住居址７軒（平安時代）、掘立柱建物址１棟、土坑３基、溝址２条、ピット２基

遺物　　土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、石器（石鏃・砥石・擦石）、鉄製品

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

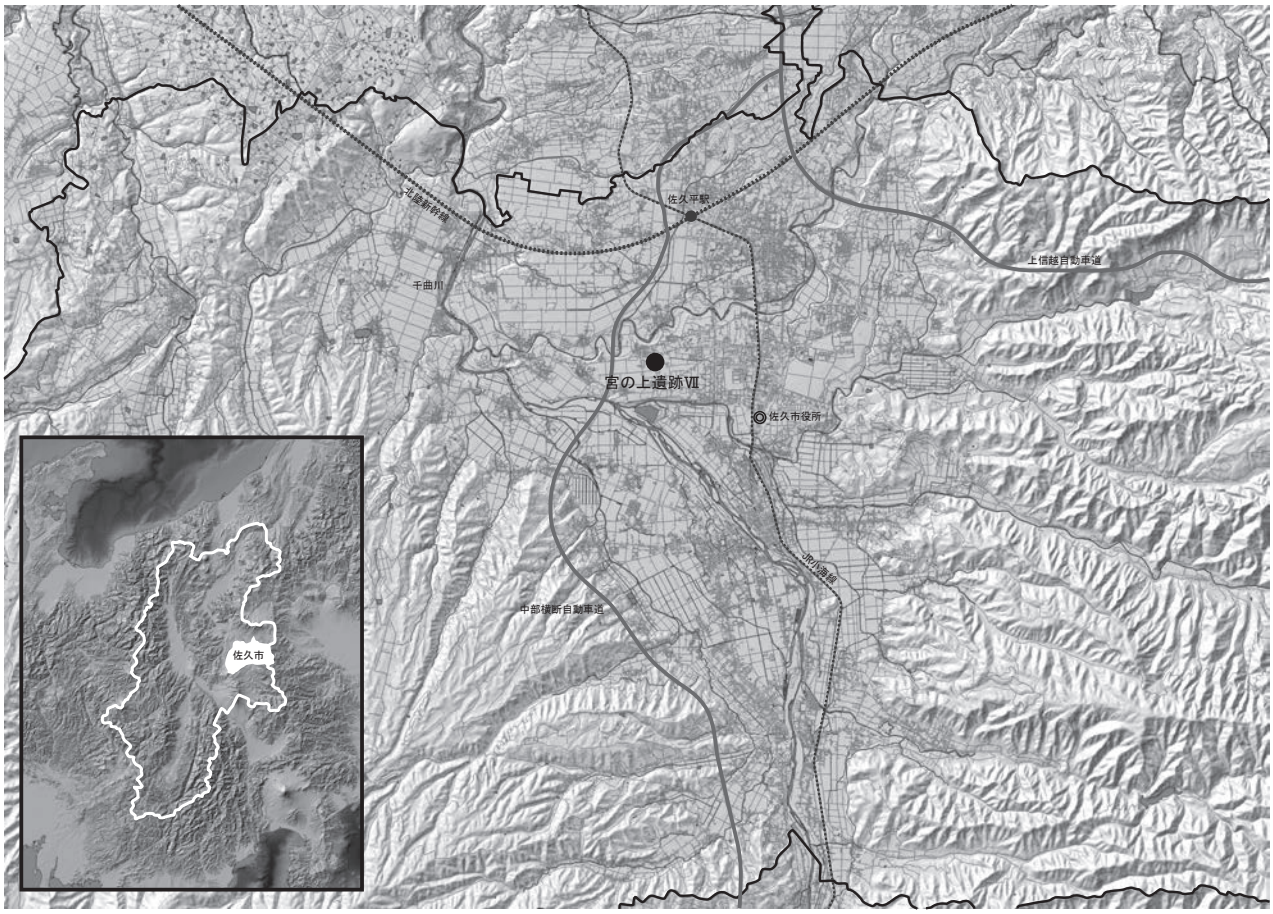
第１節　地理的環境

佐久市は長野県の中央東端、四方を山地に囲まれた標高約 700m の盆地内に位置する。

市域の地形は、周囲の火山堆積物と中央を北流する千曲川とその支流による河川堆積により形成されているが、ここでは市内の特徴的な地質について概観したい。

佐久市の北方には現在も噴煙を上げる浅間山を望むことができる。市域北側は浅間山南麓にあたり、浅間火山岩類を基盤として、その上に浅間軽石流が厚く堆積している。この堆積物が河川の浸食を受けて形成されたいわゆる「田切り」地形が特徴的に発達し、箱型に切立った台地の上に縄文時代以降の遺跡が数多く残されている。市域東側は荒船山・物見山・寄石山・八風山などを主峰とする佐久山地で、志賀溶結凝灰岩類等の鮮新世火山岩類を基盤としており、石器素材となる黒色安山岩や駒込頁岩を産出する。市域中央には周囲の山々から流れる支流を集めながら千曲川が北流し、千曲川により形成された沖積地が広がっている。市域南側から西側にかけては八ヶ岳北山麓にあたる。この地域は春日火山岩類・長者原礫層・畳石溶岩などをはじめとする八ヶ岳火山岩類を基盤とし、八ヶ岳・蓼科山から流れる河川により形成された段丘上に遺跡が展開している。市域北西部には瓜生坂累層・布引累層などの湖沼堆積物を基盤とする御牧原・八重原台地があり、古代の牧関連遺構等が確認される。

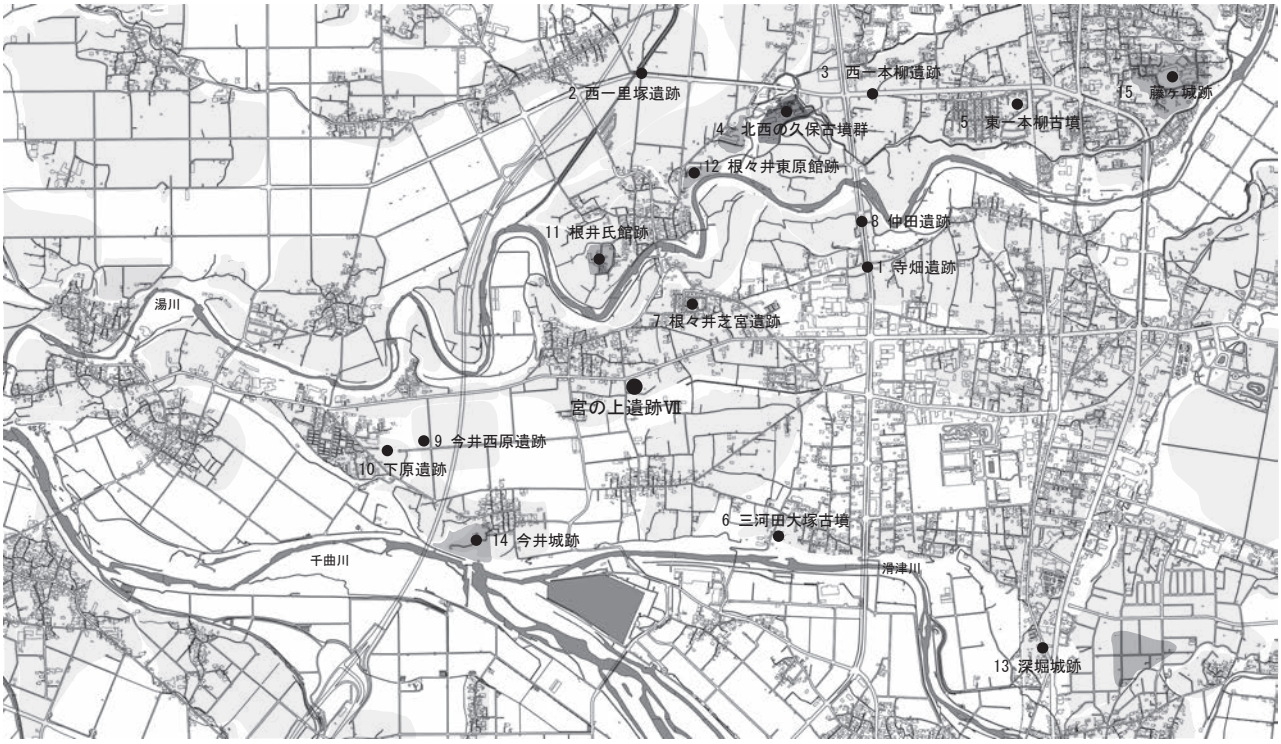
宮の前遺跡は市域北側、佐久市横和から三河田地籍に所在する。浅間山南麓の末端部に位置し、浅間軽石流が北の湯川、南の滑津川の浸食により形成された「田切り」の台地上に立地している。本遺跡周辺では、浅間軽石流上部に軽石流二次堆積物の砂礫層、いわゆる「湯川層」が堆積しており、本遺跡はこの湯川層を基盤としている。



第１図　宮の上遺跡Ⅶ位置図

第２節　歴史的環境

本遺跡が立地する台地は､約 13,000 年前の浅間軽石流及び軽石流二次堆積物により構成されており、これらの厚い堆積物により本遺跡周辺で旧石器時代の遺跡を確認することはできない。縄文時代の遺跡も希薄であるが、寺畑遺跡（1）からは縄文時代草創期の爪形文土器が出土している。弥生時代中期後半以降、湯川沿岸部では遺跡が増加する。湯川右岸の西一里塚遺跡（2）や西一本柳遺跡（3）などでは弥生時代後期の住居址が密集しており、地域の拠点を成すような大集落が存在していたと考えられる。古墳時代になると、一時的に遺跡は減少するが、古墳時代中期後半以降再び遺跡は増加し、古墳も築かれるようになる。北西の久保古墳群（4）からは多量の形象埴輪が、東一本柳古墳（5）からは金銅製の馬具が出土している。また、本遺跡南東の滑津川右岸には、佐久市最大の円墳である三河田大塚古墳（6）が存在する。奈良・平安時代には台地全体に集落が拡散し、本遺跡が形成されるのもこのころである。湯川左岸では他にも根々井芝宮遺跡（7)、仲田遺跡（8)、今井西原遺跡（9)、下原遺跡（10）などで住居址が発見されている。仲田遺跡では、白銅鏡（花卉双蝶八花鏡）や「寺」の文字が墨書された土器など、寺院の存在を示唆するような遺物が出土している。中世では湯川右岸に根井氏館跡（11）や根々井東原館跡（12)、滑津川右岸には深堀城跡（13）や今井城跡（14）などの城館跡が存在する。藤ヶ城跡（15）では、発掘調査により中世の堀跡も確認されている。

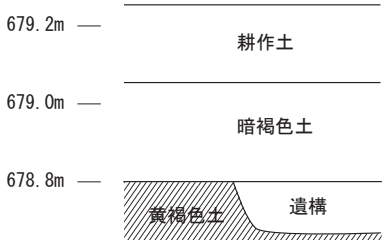


第２図　宮の上遺跡Ⅶ周辺の遺跡分布図

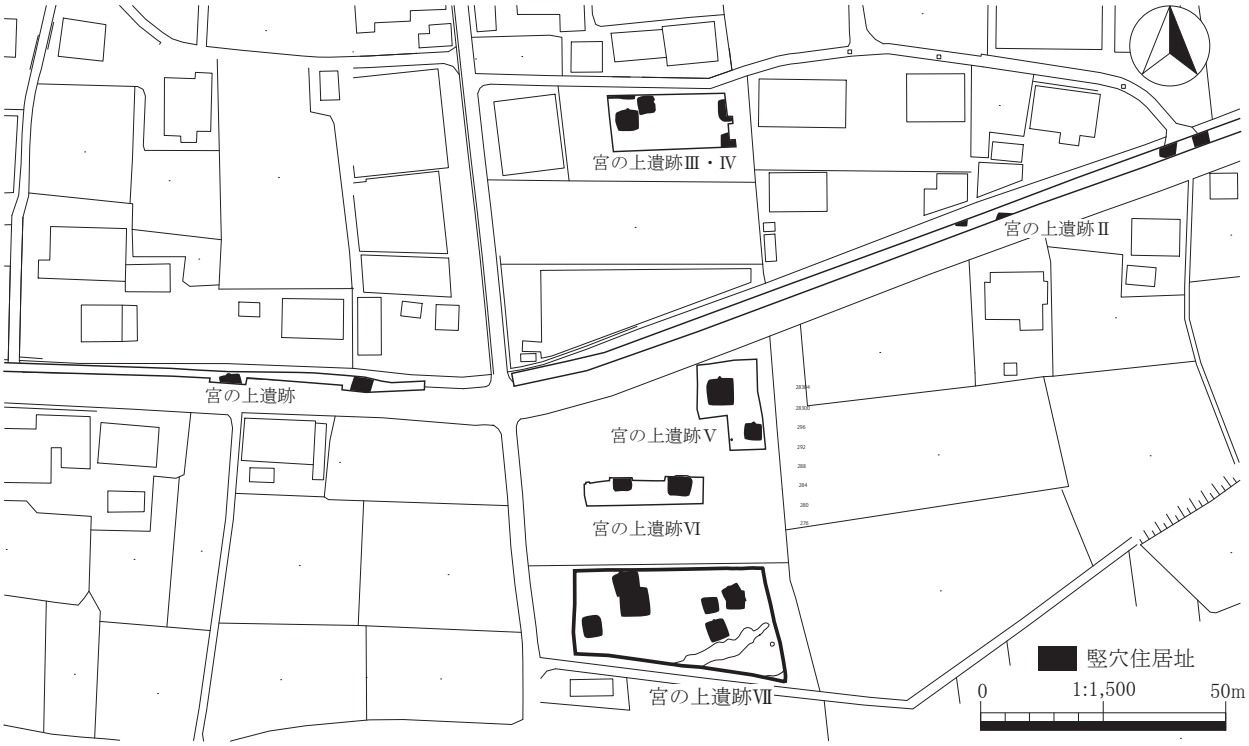
第３節　基本層序

本調査区の基本層序は、上位から耕作土、暗褐色土、黄褐色土に大別される。黄褐色土は浅間軽石流の二次堆積物と考えられる地山で、本調査区ではこの地山上面で遺構を検出した。

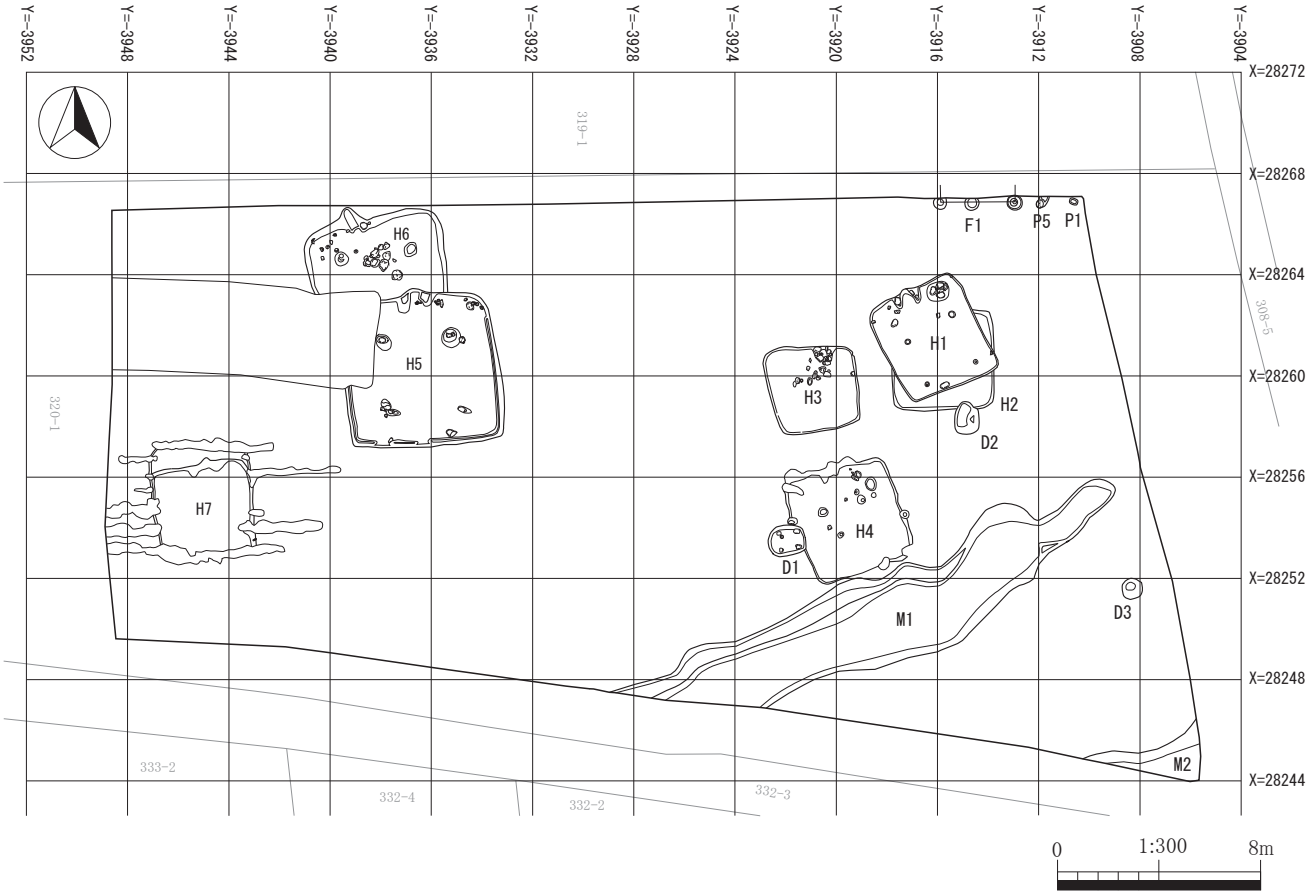
地山とその上位の暗褐色土との層界が非常に明瞭であることから、過去に地山まで削平されており、暗褐色土は客土と考えられる。



第３図　基本層序模式図



第４図　宮の上遺跡調査区位置図



第５図　宮の上遺跡Ⅶ調査区全体図

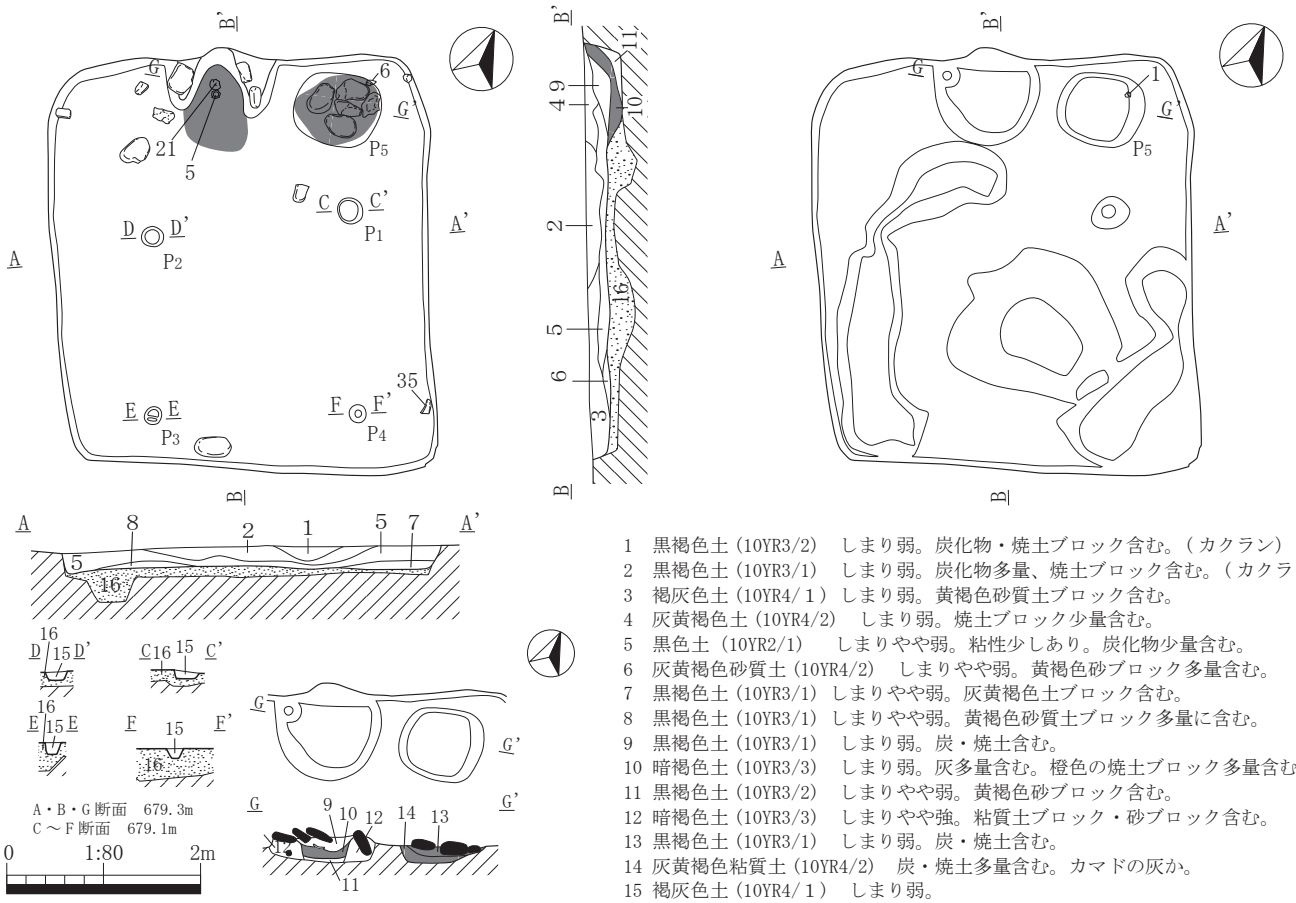
第Ⅲ章　遺構と遺物

H1 号住居址（第 6・7 図）

調査区東側に位置し、H2 号住居址より新しい。長軸 4.06m、短軸 3.76m、床面積 15.26 ㎡を測る方形の住居址である。検出面から床面までの深さは 0.23m、主軸は W-25°－N である。床面は硬質で、柱穴と考えられるピットが 4 基検出された。住居址北東側で検出された土坑は、長軸 0.86m、短軸 0.74 m、深さ 0.17 m を測る隅丸方形で、埋土には灰や炭化物を多量に含み、上部には扁平な礫が配されている。カマドは扁平な円礫を芯とし、粘質土で被覆して構築される。住居掘方は床面から 0.03 ～ 0.34m で、中央から南側の壁際が深く掘り込まれている。

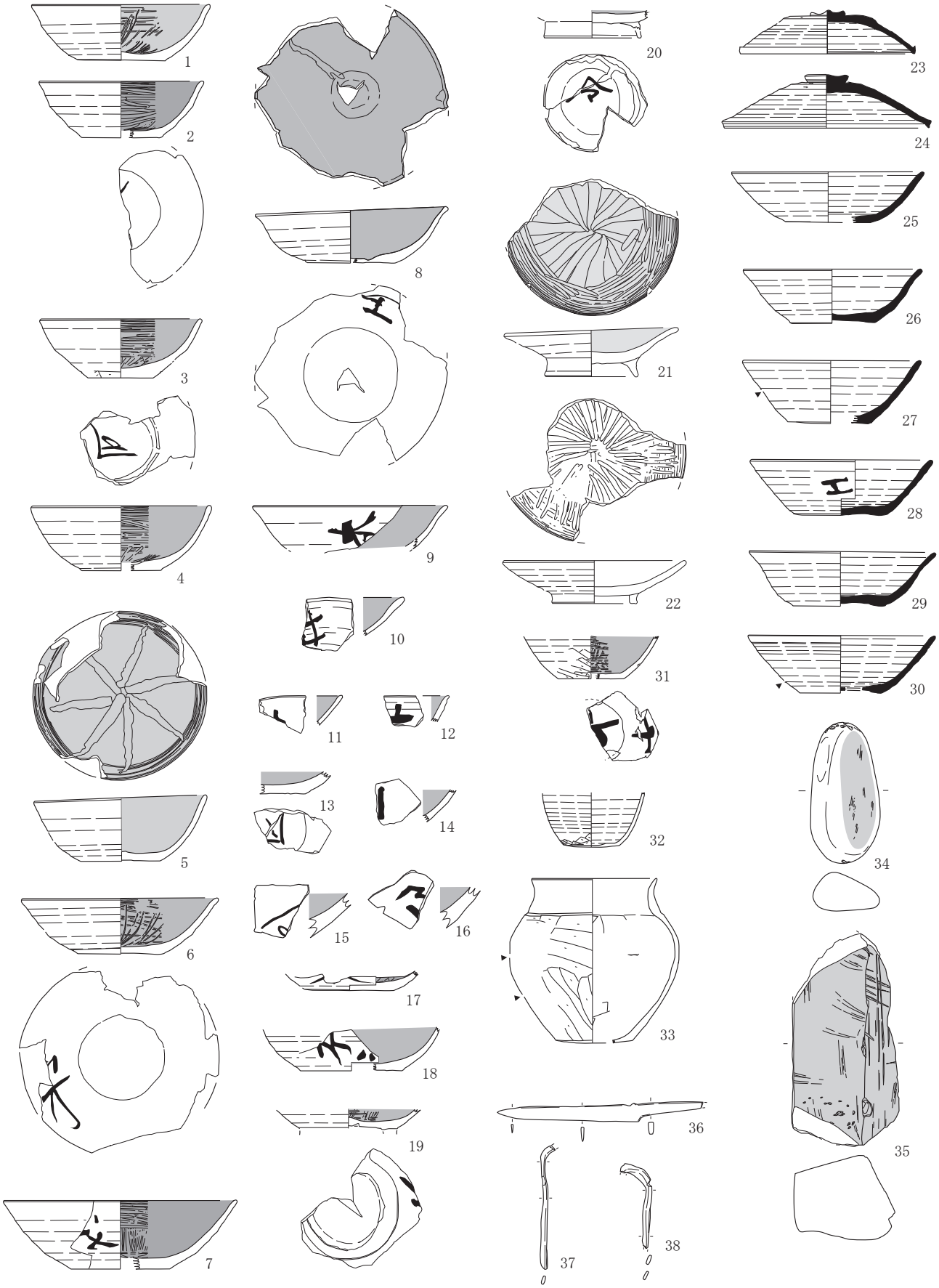
遺物は土師器・須恵器の坏を主体に出土しており、墨書されたものが一定数認められる。1 ～ 18 は土師器の坏、19・20 は土師器の椀で、いずれも内面黒色処理が施され、底部に回転糸切痕が認められる。2・3・13・20 は底部に、6 ～ 12・14 ～ 18 は体部に墨書が認められる。21・22 は土師器の皿で、21 は内面黒色処理が施され、カマドの焼土内から出土した。23・24 は須恵器の蓋、25 ～ 30 は須恵器の坏である。須恵器坏の底部には回転糸切痕が認められ、28 には墨書が認められる。31 は土師器の鉢で、底部と体部に墨書が認められる。32・33 は土師器の甕である。34 は磨石である。35 は砥石で、住居址南東側の壁際から出土した。36 ～ 38 は鉄製品で、36 は刀子、37・38 は鑷子と考えられる。

これらの出土遺物から、本址は 9 世紀後半の所産と考えられる。

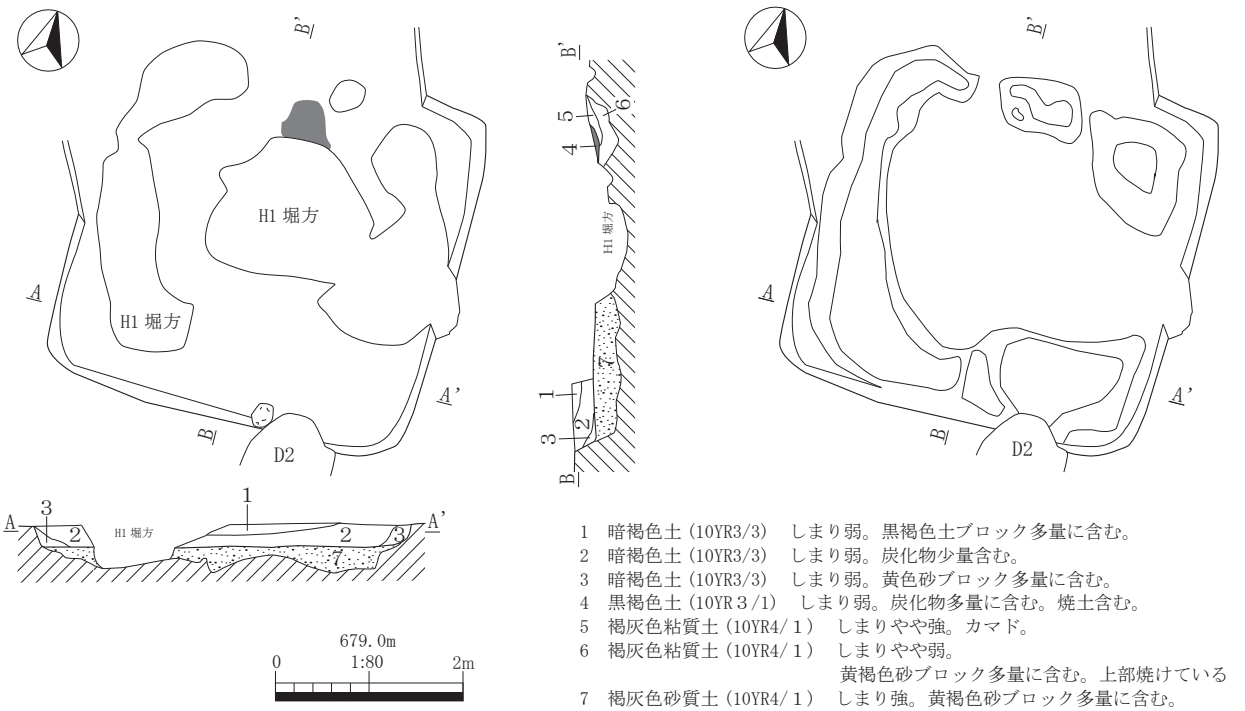


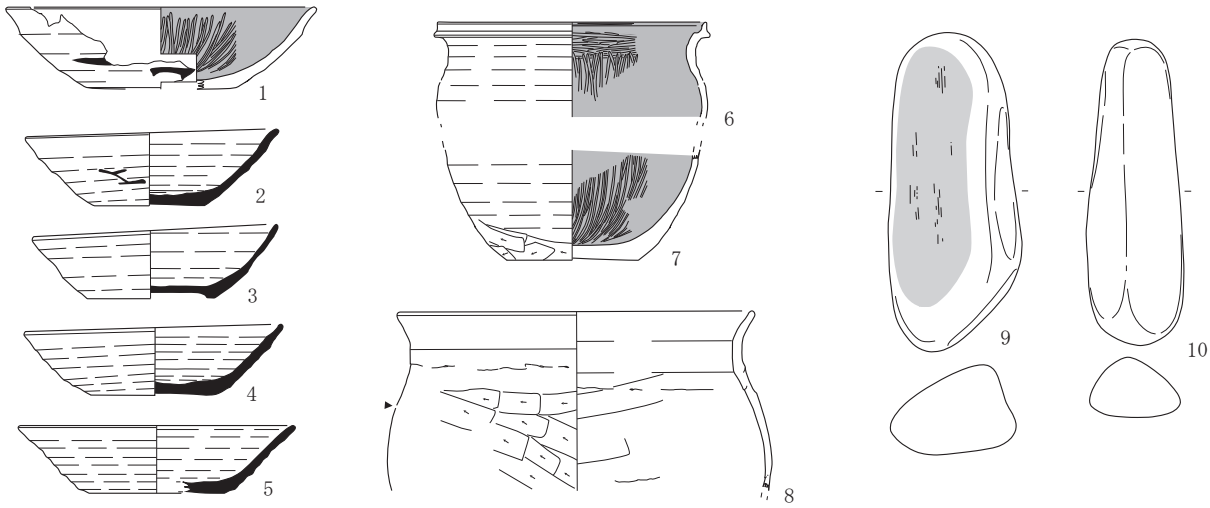
1　黒褐色土（10YR3/2）　しまり弱。炭化物・焼土ブロック含む。（カクラン）
2　黒褐色土（10YR3/1）　しまり弱。炭化物多量、焼土ブロック含む。（カクラン）
3　褐灰色土（10YR4/１）しまり弱。黄褐色砂質土ブロック含む。
4　灰黄褐色土（10YR4/2）　しまり弱。焼土ブロック少量含む。
5　黒色土（10YR2/1）　しまりやや弱。粘性少しあり。炭化物少量含む。
6　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）　しまりやや弱。黄褐色砂ブロック多量含む。
7　黒褐色土（10YR3/1）しまりやや弱。灰黄褐色土ブロック含む。
8　黒褐色土（10YR3/1）しまりやや弱。黄褐色砂質土ブロック多量に含む。
9　黒褐色土（10YR3/1）　しまり弱。炭・焼土含む。
10 暗褐色土（10YR3/3）　しまり弱。灰多量含む。橙色の焼土ブロック多量含む。
11 黒褐色土（10YR3/2）　しまりやや弱。黄褐色砂ブロック含む。
12 暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや強。粘質土ブロック・砂ブロック含む。
13 黒褐色土（10YR3/1）　しまり弱。炭・焼土含む。
14 灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　炭・焼土多量含む。カマドの灰か。
15 褐灰色土（10YR4/１）　しまり弱。
16 暗褐色土（10YR3/3）　しまり強。黄褐色砂ブロック・炭化物含む。住居址堀方。

第 6 図　H1 号住居址遺構図



第 7 図　H1 号住居址遺物図





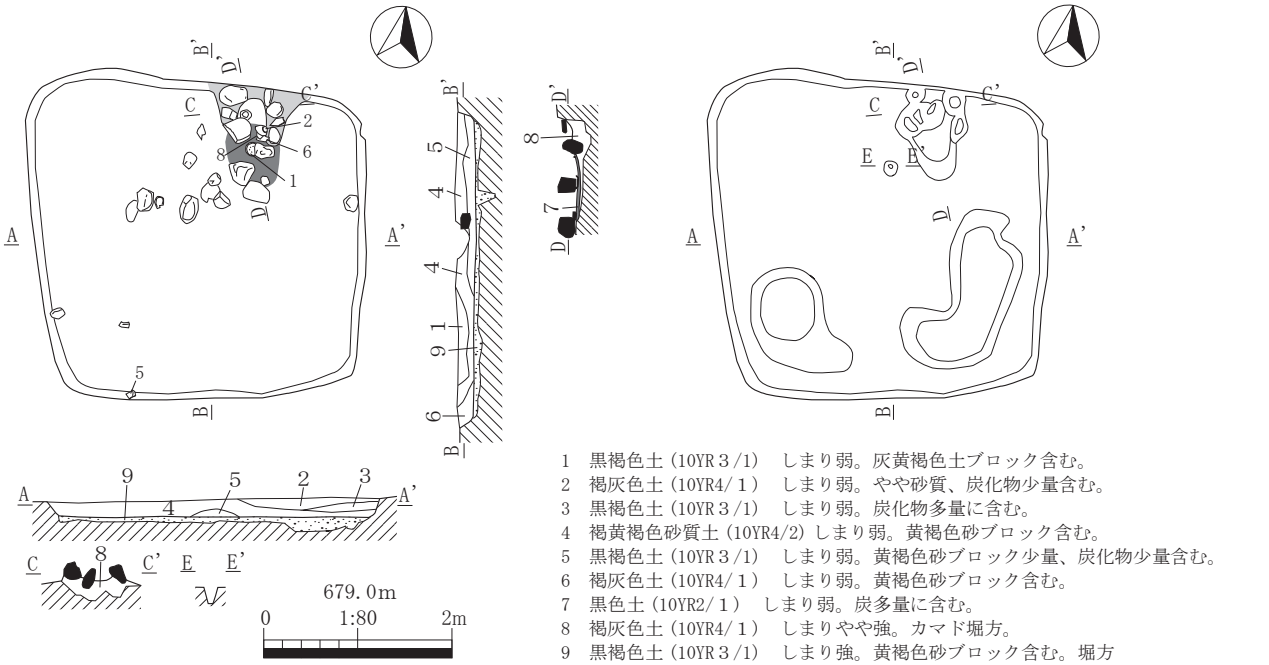
第８図　H2 号住居址遺構図・遺物図

H2 号住居址（第８図）

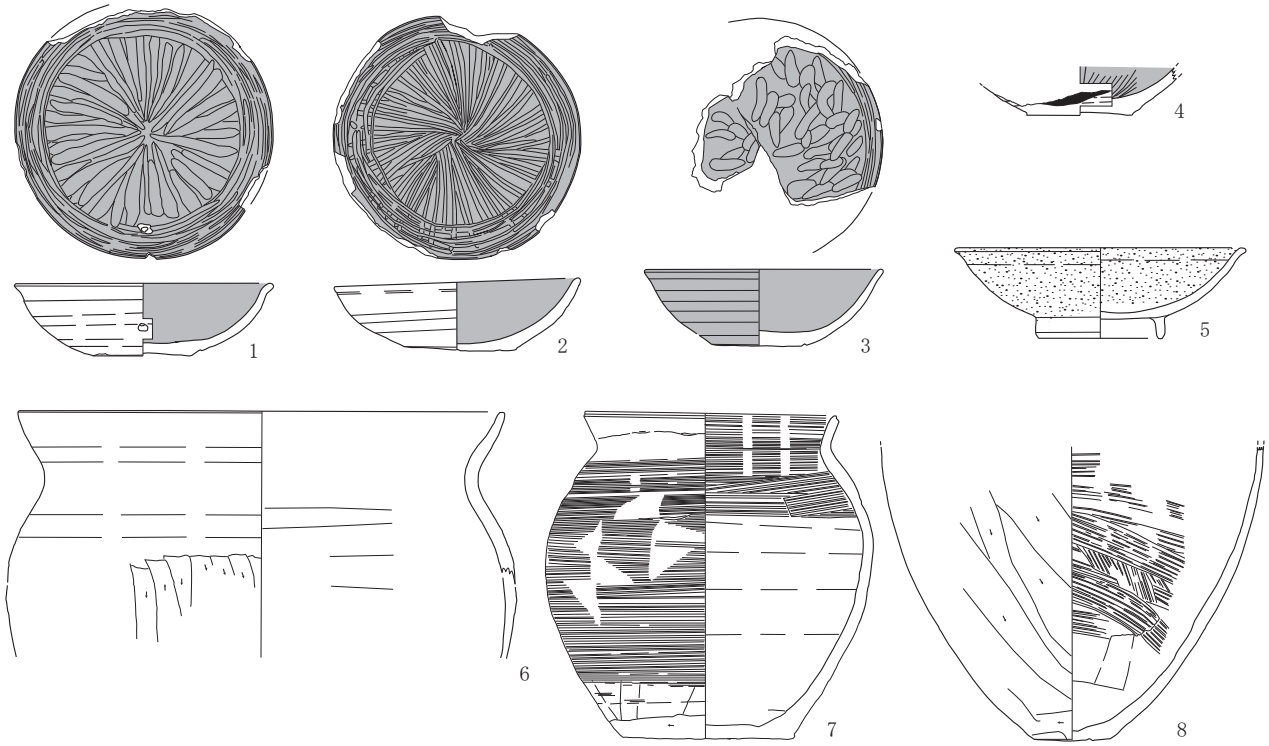
調査区東側に位置し、H1 号住居址、D2 号土坑より古い。長軸 3.85m、短軸 3.62m、床面積 13.94 ㎡を測る方形の住居址である。検出面から床面までの深さは 0.46m、主軸は W-2°－N である。住居址中央から北側は H1 号住居址により破壊されるが、南側では硬質な床面が確認できる。ピットは検出されなかった。カマドは北側中央に位置していたと考えられ、焼土のみ遺存していた。住居掘方は床面から 0.07 ～ 0.27m で、周囲の壁際が深く掘り込まれている。

1 は土師器の坏で、底部には回転糸切痕が認められ、内面黒色処理が施される。体部には墨書が認められる。2 ～ 5 は須恵器の坏で、いずれも底部に回転糸切痕が認められる。6・7 は土師器の鉢で、内面黒色処理が施される。8 は土師器の甕である。9・10 は磨石である。

出土遺物から、本誌は 9 世紀後半の所産と考えられる。



1　黒褐色土（10YR３/1）　しまり弱。灰黄褐色土ブロック含む。
2　褐灰色土（10YR4/１）　しまり弱。やや砂質、炭化物少量含む。
3　黒褐色土（10YR３/1）　しまり弱。炭化物多量に含む。
4　褐黄褐色砂質土（10YR4/2）しまり弱。黄褐色砂ブロック含む。
5　黒褐色土（10YR３/1）　しまり弱。黄褐色砂ブロック少量、炭化物少量含む。
6　褐灰色土（10YR4/１）　しまり弱。黄褐色砂ブロック含む。
7　黒色土（10YR2/１）　しまり弱。炭多量に含む。
8　褐灰色土（10YR4/１）　しまりやや強。カマド堀方。
9　黒褐色土（10YR３/1）　しまり強。黄褐色砂ブロック含む。堀方



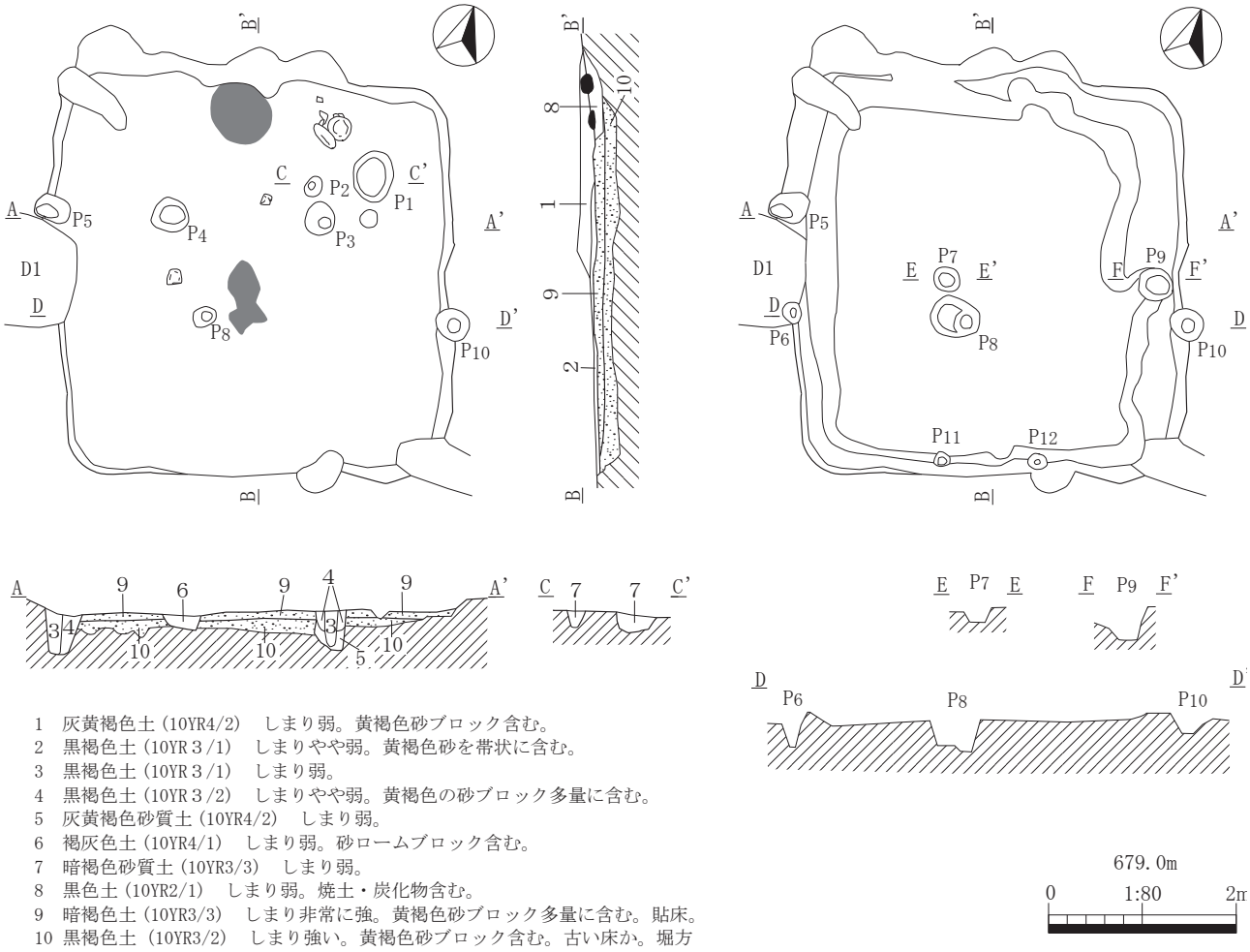
第９図　H3 号住居址遺構図・遺物図

H3 号住居址（第９図）

調査区東側に位置する。長軸 3.34m、短軸 3.20m、床面積 10.69 ㎡を測り、北西側がやや張った台形を呈する住居址である。検出面から床面までの深さは 0.19m、主軸はW-9°－Nである。床面は硬質で、ピットは掘方検出時に１基確認された。カマドは北側の東寄りに位置し、円礫を粘土で被覆して構築される。住居掘方は床面から 0.06 ～ 0.15m で、南東及び南西部分が深く掘り込まれる。遺物は１～４

が土師器の坏で、いずれも内面黒色処理が施される。1は内面に放射状の暗文が施され、体部中央に穿孔される。2～4は底部に回転糸切痕が認められ、4は体部に墨書が認められる。5は灰釉陶器の椀である。6～8は土師器の甕である。

出土遺物から、本址は9世紀の所産と考えられる。



第10図　H4号住居址遺構図

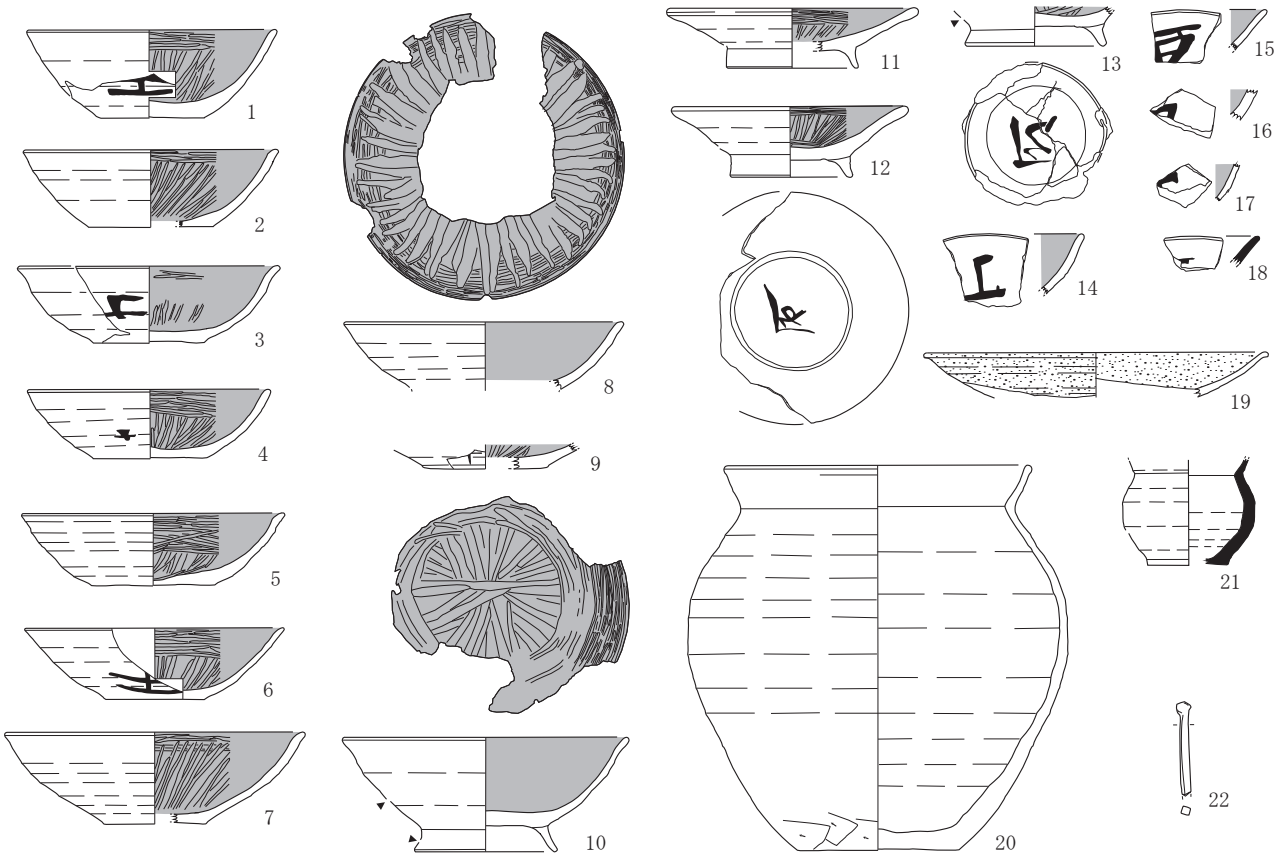
H4号住居址（第10・11図）

調査区東側に位置し、D1号土坑より古い。長軸4.00m、短軸3.95m、床面積15.80㎡を測る方形の住居址である。耕作による攪乱を受け、上部がかなり破壊されている。検出面から床面までの深さは0.18m、主軸はW-20°－Nである。床面は非常に硬質で上下2面確認され、掘方で拡張された痕跡が確認できる。ピットは12基確認された。上位の床面では、P3及びP5では柱痕が確認できるが、遺構主軸に対して西側に偏った配置となり、P8とP10は東側に偏った配置となる。下位の床面ではP6・P7・P9が柱穴と考えられるが、両側が住居址壁面にかかる配置となっている。P11・P12は入口施設に関わるピットと考えられる。カマドは北側中央に位置する。

遺物は土師器を主体とする。1～9、14～16は土師器の坏である。いずれも内面黒色処理が施され、1～9は底部に回転糸切痕を留める。1・3・4・6・9・14～16には墨書が認められる。10・13は土師器の椀で、内面黒色処理が施される。13は底部に「令」の墨書が認められる。11・12は土師器の皿で、内面黒色処理が施される。12の底部には「令」の墨書が認められる。17は土師器の鉢と考えられる。

内面黒色処理が施され、墨書が認められる。18 は須恵器の坏で、外面に墨書が認められる。19 は灰釉陶器の皿である。20 はロクロ成形による土師器の甕で、21 は須恵器の壺である。22 は鉄製品の釘と考えられる。

本址は、出土遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀初頭の所産と考えられる。

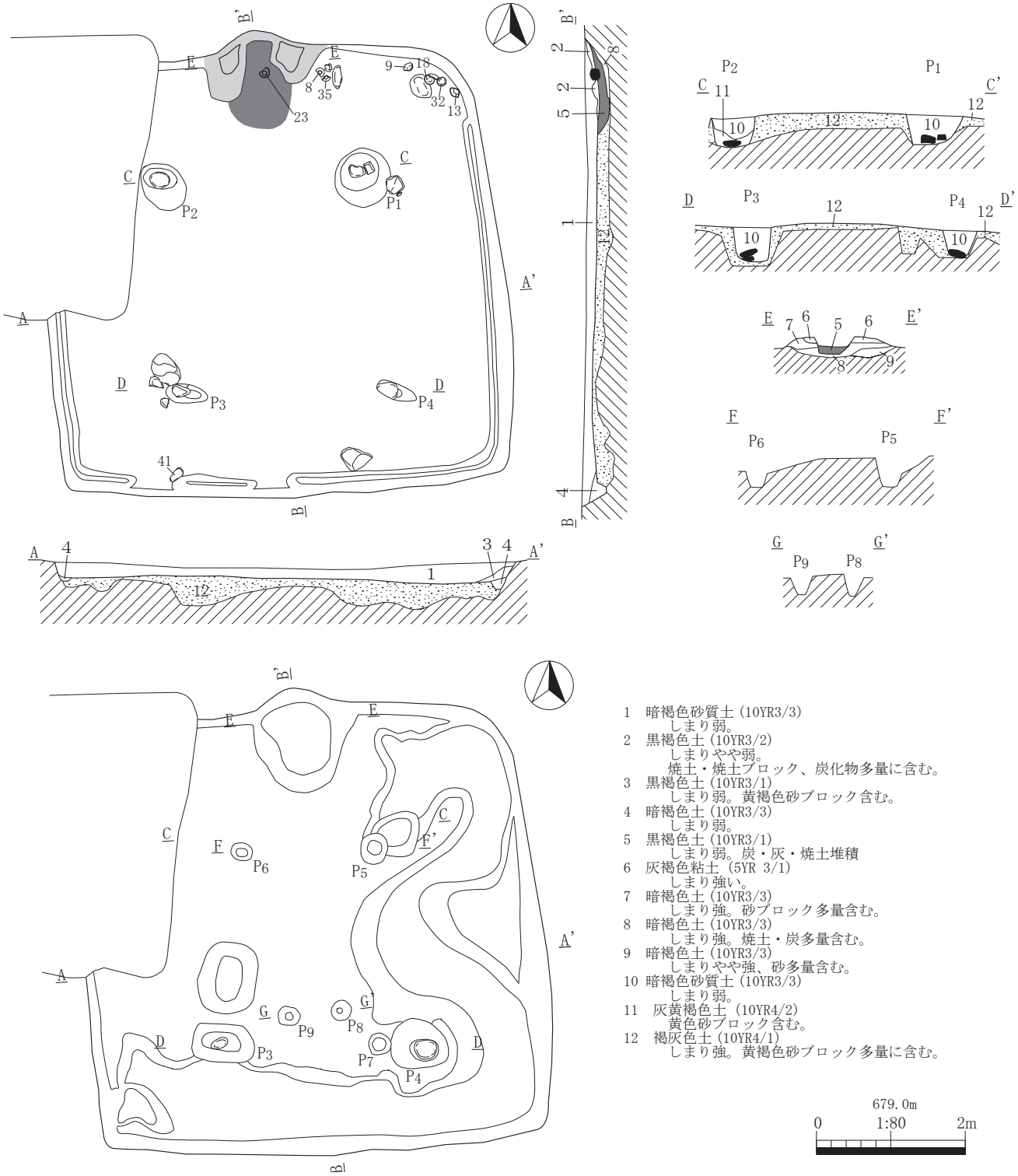


第 11 図　H4 号住居址遺物図

H5 号住居址（第 12・13 図）

調査区西側に位置し､H6 号住居址より新しい。北西側の一部を攪乱により破壊されるが､長軸 6.00m、短軸 5.64m、床面積 33.84 ㎡を測る方形の住居址である。検出面から床面までの深さは 0.26m、主軸は W-4°－N である。床面は硬質で、ピットは掘方を含め 9 基確認された。P1 ～ P4 は柱穴と考えられ、いずれのピットも下部に扁平な礫が認められる。根石に用いられたものであろうか。柱間は 2.6 ～ 2.9m である。カマドは北側中央に位置し、暗褐色土及び褐灰色粘土により構築される。掘方の深さは床面から 0.07 ～ 0.39m で、南側と東側の壁際が深く掘り込まれる。また P5 ～ P7 は古い柱穴で、P5 から P1、P6 から P2、P7 から P4 へと柱を入れ替え、住居の拡張が行われたと考えられる。P8・P9 は拡張前の住居入口施設に伴うピットと考えられる。

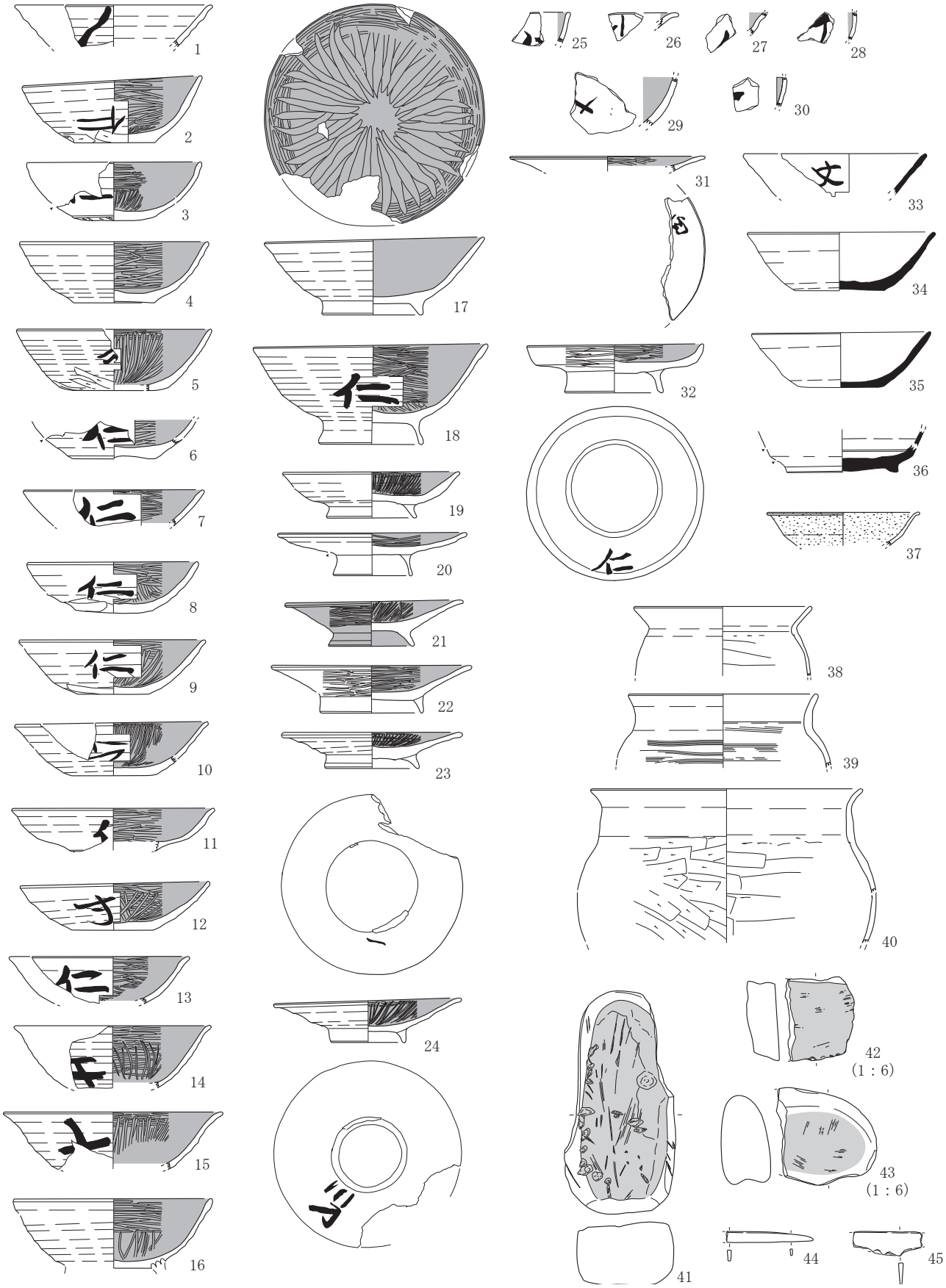
遺物は土師器を主体とし、墨書された坏が目立つ。1 ～ 15・25・27 ～ 30 が土師器の坏で、1 以外は内面黒色処理が施される。体部に「仁」や「寸」などの文字が墨書されるものが多く、2 のように逆位に書かれるものもある。16 ～ 18 は土師器の碗で、内面黒色処理が施される。18 には「仁」の墨書が認められる。19 ～ 24・26・31・32 は土師器の皿である。いずれも内面黒色処理が施されるが、21 は外面にも黒色処理が施される。体部が緩く内湾するもの、緩く外反するもの、上方に屈曲するものなどの形態がみられ、墨書されたものも認められる。33 ～ 35 は須恵器の坏、36 は須恵器の有台坏で



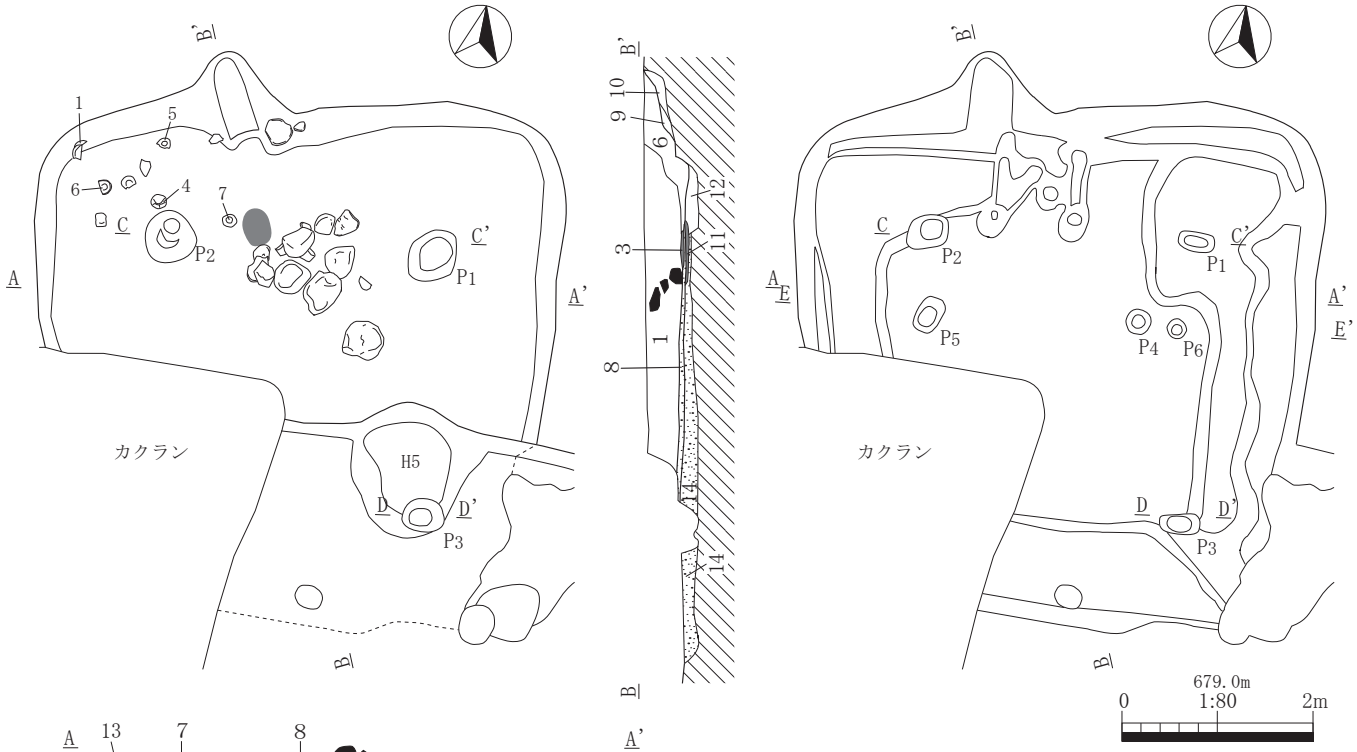
第 12 図　H5 号住居址遺構図

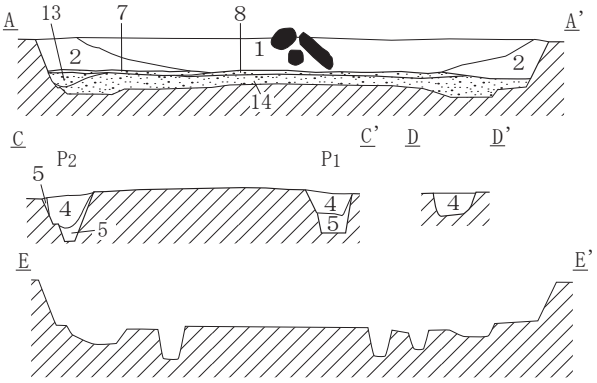
ある。33 には「丈」と考えられる文字が墨書される。37 は灰釉陶器の椀である。38 ～ 40 は土師器の甕で、38・39 はロクロ成形による。41 は砥石で、住居南側の壁際で出土した。42・43 は磨石である。44・45 は鉄製品で、刀子である。

出土遺物から、本址は 9 世紀後半の所産と考えられる。

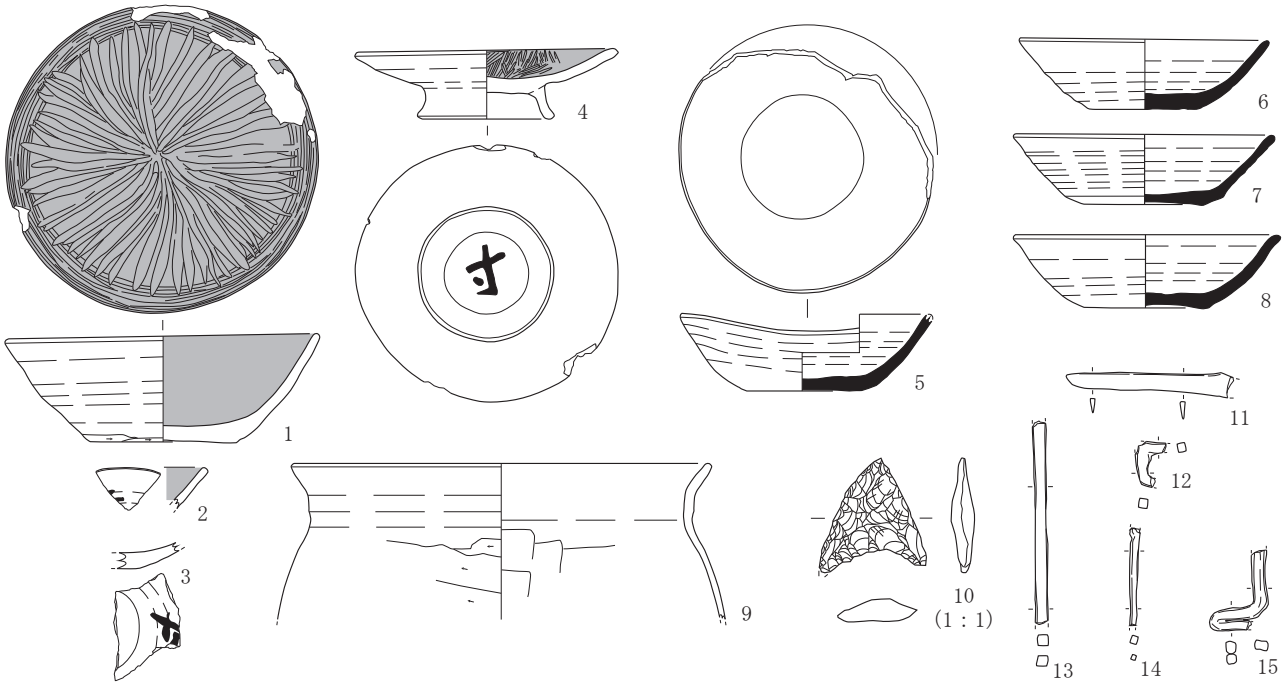


第 13 図　H5 号住居址遺物図





1　黒褐色土（10YR3/1）　しまり弱。砂質土。
　　暗褐色土ブロック・褐色砂ブロック多量に含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　しまりやや弱。砂含む。
3　黒色土（10YR2/1）　炭・焼土・灰堆積。
4　褐灰色土（10YR4/1）　しまり弱。砂ブロック含む。
5　褐灰色土（10YR4/1）　地山ブロック含む。
6　灰褐色粘質土（5YR4/2）　しまりやや強。砂少量含む。
7　明黄褐色砂質土（10YR6/6）　しまり強。黒色土ブロック含む。
8　暗褐色土（10YR3/3）　しまり強。砂ブロック多量に含む。
9　黒褐色土（10YR3/1）　しまりやや強。粘質土。
10　黒褐色土（10YR3/2）　しまりやや弱。砂質土。砂多量に含む。
11　黒色土（10YR2/1）　炭・焼土・灰堆積。
12　褐灰色土（10YR4/1）　しまりやや強。粘質土。
13　黒色土（10YR2/1）　しまり弱。堀方。
14　黒褐色土（10YR3/1）　しまり強。砂質土。黄褐色砂帯状に多量含む。



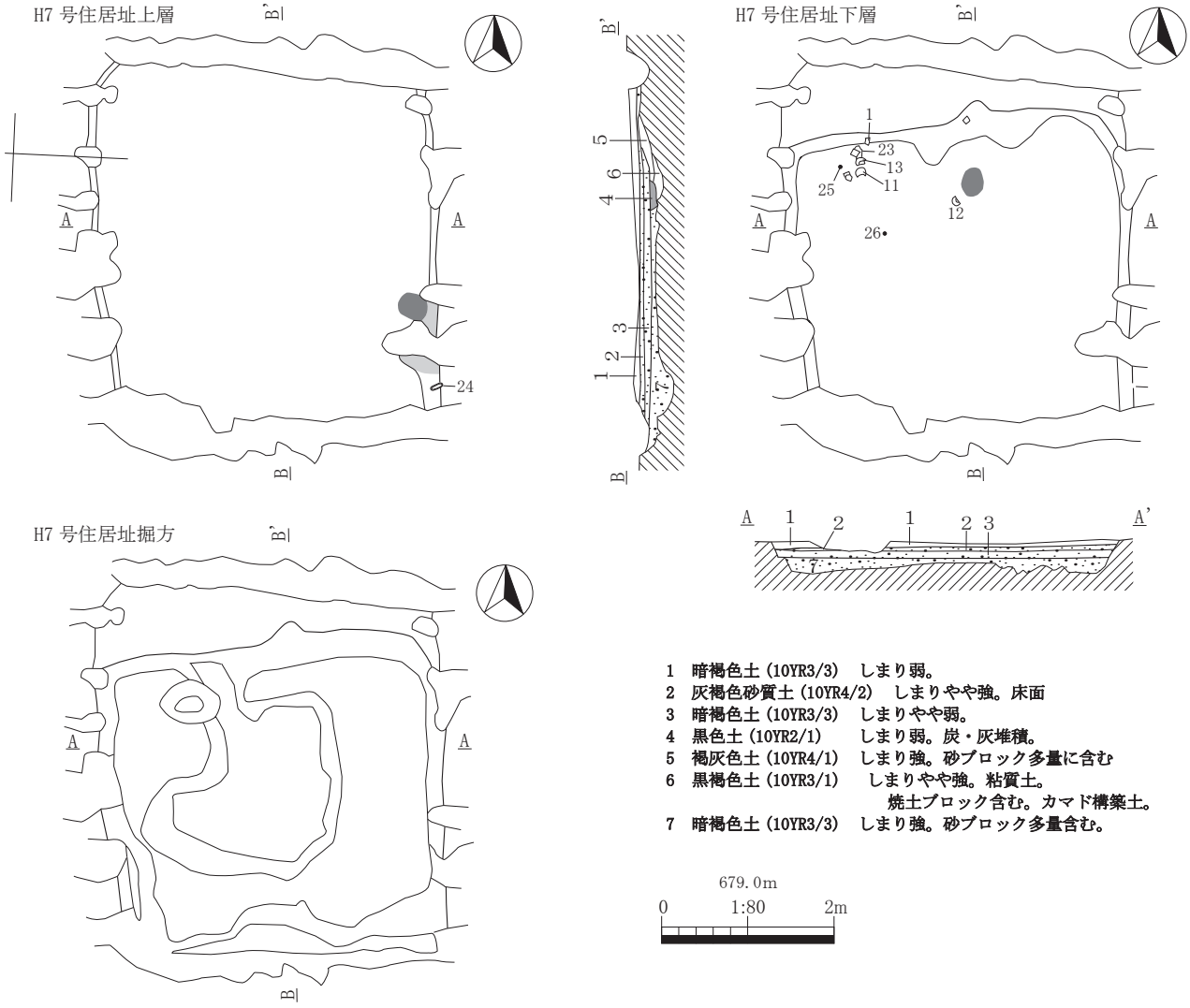
第 14 図　H6 号住居址遺構図・遺物図

H6 号住居址（第 14 図）

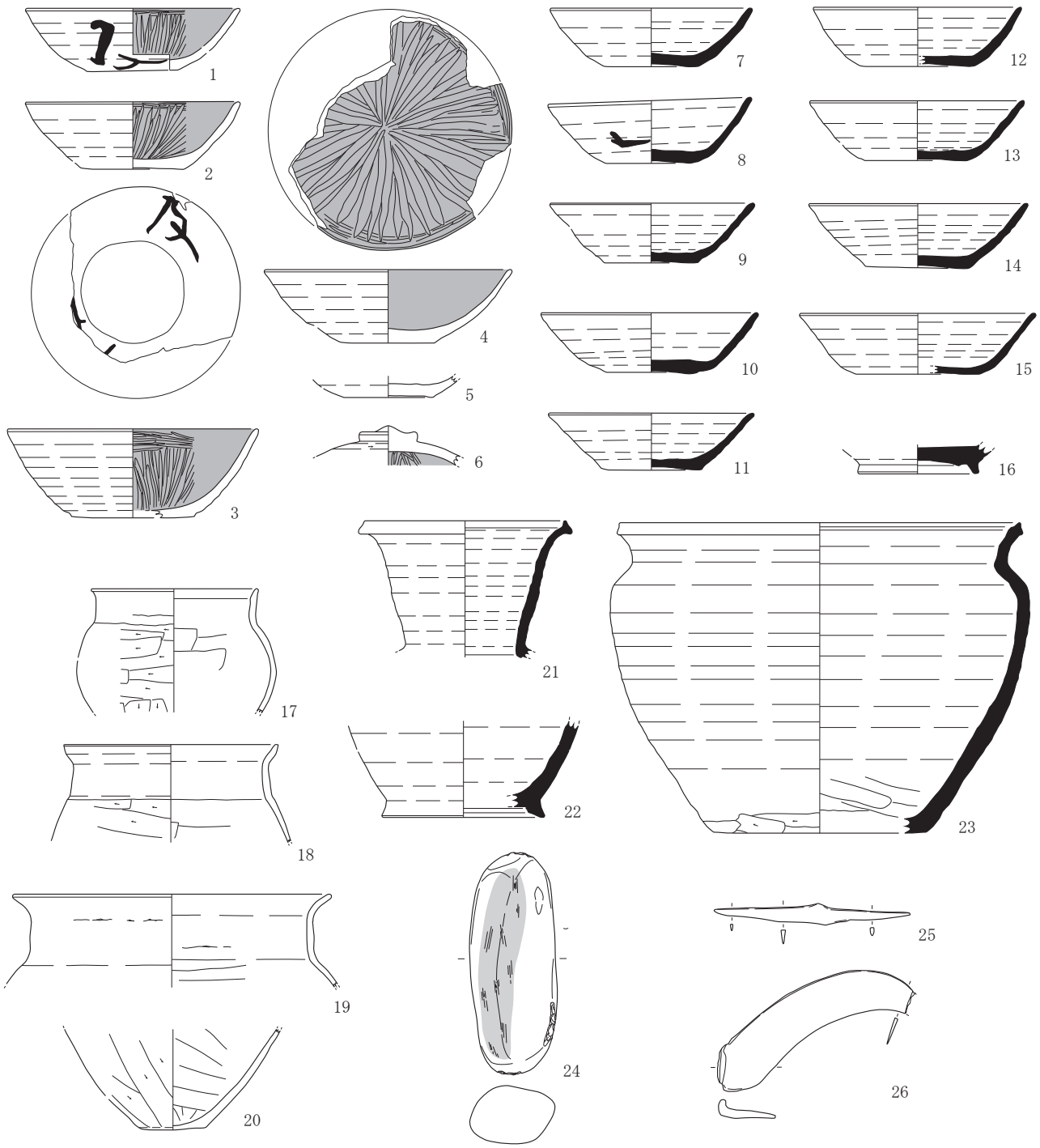
調査区西側に位置し、H5 号住居址より古い。南側を H5 号住居及び攪乱により破壊されるが、南北 5.03m、東西 5.08m を測る方形の住居址と考えられる。検出面から床面までの深さは 0.35m で、主軸は W-12° -N である。住居址南半は H5 号住居に切られるため床面は残っていないが、北半では上下 2 面の硬質面が確認できた。ピットは 6 基検出された。P_1 ～ P_3 は柱穴と考えられ、柱間は 2.73 ～ 2.79m を測る。P_4・P_5 は掘方で検出され、下層床面の柱穴と考えられる。柱間は 2.19m を測る。カマドは北側のやや西寄に位置するが、焼土層が 2 層確認でき、北側中央にもカマド掘方が確認できるため、住居の建替えに伴いカマドも作り替えられていると考えられる。掘方は床面から 0.09 ～ 0.21m で、外周部の壁際が深く掘り込まれる。

遺物は 1 ～ 3 が土師器の坏、4 が土師器の皿である。1・2・4 は内面黒色処理が施され、2・3・4 は墨書が確認できる。5 ～ 8 は須恵器の坏で、5 は杓状坏と考えられる。9 は土師器の甕である。10 は黒曜石製の石鏃で、混入品と考えられる。11 ～ 15 は鉄製品で、11 は刀子、14 は釘、13・15 は角軸と考えられる。12 は両端を欠損したものと考えられるが、製品は不明である。

出土遺物から、本址は 9 世紀の所産と考えられる。



第 15 図　H7 号住居址遺構図



第 16 図　H7 号住居址遺物図

H7 号住居址（第 15・16 図）

調査区西側に位置し、南北両側を攪乱により破壊されるが、住居の拡張による上下 2 面の床面が確認された。上位の住居址は南北 3.98m 以上、東西 3.85m、床面積 15.32 ㎡以上を測る方形の住居址で、検出面から床面までの深さは 0.09m、主軸は W-3°　-N である。下位住居址の東西辺を残し北側に拡張して床を構築している。ピットは確認されなかった。カマドは東側南寄りに位置するが、攪乱により大部分が破壊されており、焼土の周囲にわずかに粘土が遺存している。下位の住居址は南北 3.27m 以上、

東西 3.66m、床面積 11.96 ㎡以上の方形の住居址と考えられ、上位の床面からの深さは 0.13m、主軸は W-10°　-N である。床面は硬質で、ピットは確認されなかった。カマドは北側中央に位置し、住居拡張時に壊されている。掘方の深さは下位の床面から 0.04 ～ 0.16m で、外周部の壁際を深く掘り込んでいる。

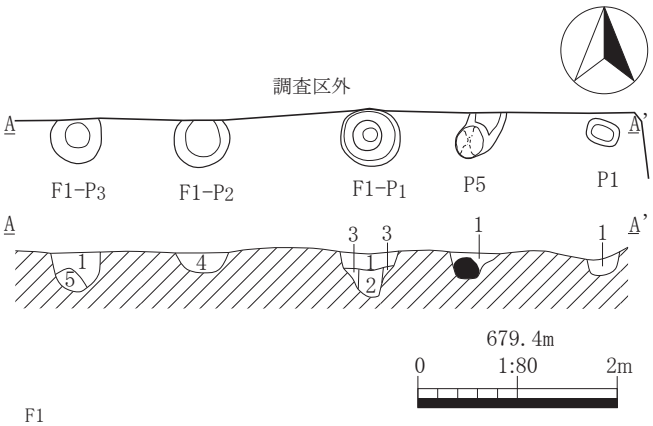
遺物は 1 ～ 5 が土師器の坏、6 が土師器の蓋である。1 ～ 4 は内面黒色処理が施され、2 は外面両側に墨書が認められる。7 ～ 15 は須恵器の坏、16 は須恵器の有台坏である。いずれも底部に回転糸切痕を留める。8 は記号状の墨書が認められる。17 ～ 20 は土師器の甕で、口縁部はコの字となる。21・22 は須恵器の壺、23 は須恵器の甕である。25・26 は鉄製品で、25 は刀子、26 は鎌である。

出土遺物から、本址は 9 世紀の所産と考えられる。

F1 号掘立柱建物址（第 17 図）

調査区北東端に位置する。北側が調査区外に延びるため全容は不明だが、ピットの形状や主軸方向から掘立柱址と判断した。東西 2.95m、柱間は 1.26m と 1.68m である。P1 では柱痕が確認できる。本址東側の直線状に P1、P5 が検出されているが、ピットの大きさや埋土の状況から本址とは別の単独ピットと判断した。

本址からは遺物が出土しなかったため時期は不明だが、周囲の竪穴住居址と同時期に位置づけられるものと考えられる。



F1
1　10YR（4/1）褐灰色土　しまりやや弱。φ1 cm以下の礫含む。
2　10YR（3/1）黒褐色土　しまりやや弱。φ1 cm以下の礫含む。
3　10YR（4/1）褐灰色土　しまりやや弱。黄褐色砂ブロック多量含む。
4　10YR（3/1）黒褐色土　しまりやや弱。φ1 cm以下の礫含む。
5　10YR（3/1）黒褐色土　しまりやや弱。黄褐色砂ブロック多量含む。

P1
1　10YR（3/1）黒褐色土　黄褐色砂ブロック含む。φ1 cm以下の礫含む

P5
1　10YR（3/1）黒褐色土　黄褐色砂ブロック含む。円礫含む。

第 17 図　F1 号掘立柱建物址遺構図

D1 号土坑（第 18 図）

調査区東側に位置し、H4 号住居址より新しい。長軸 1.47m、短軸 1.19m、深さ 0.19m を測り、主軸は N-82°　-E である。平面形は隅丸長方形を呈し、東側の壁面は垂直に、西側は緩やかに立ち上がる。底部の四隅には直径 20 cm前後の扁平な円礫が方形に配置され、北西側の礫の内側に土師器の坏（1）が置かれていた。1 は内面黒色処理が施され、ミガキによる放射状の暗文が認められる。底部には回転糸切痕を留める。また、体部には「土」の文字が墨書される。

H4 号住居址との新旧関係から、本址は 9 世紀後半以降の所産と考えられる。

D2 号土坑（第 18 図）

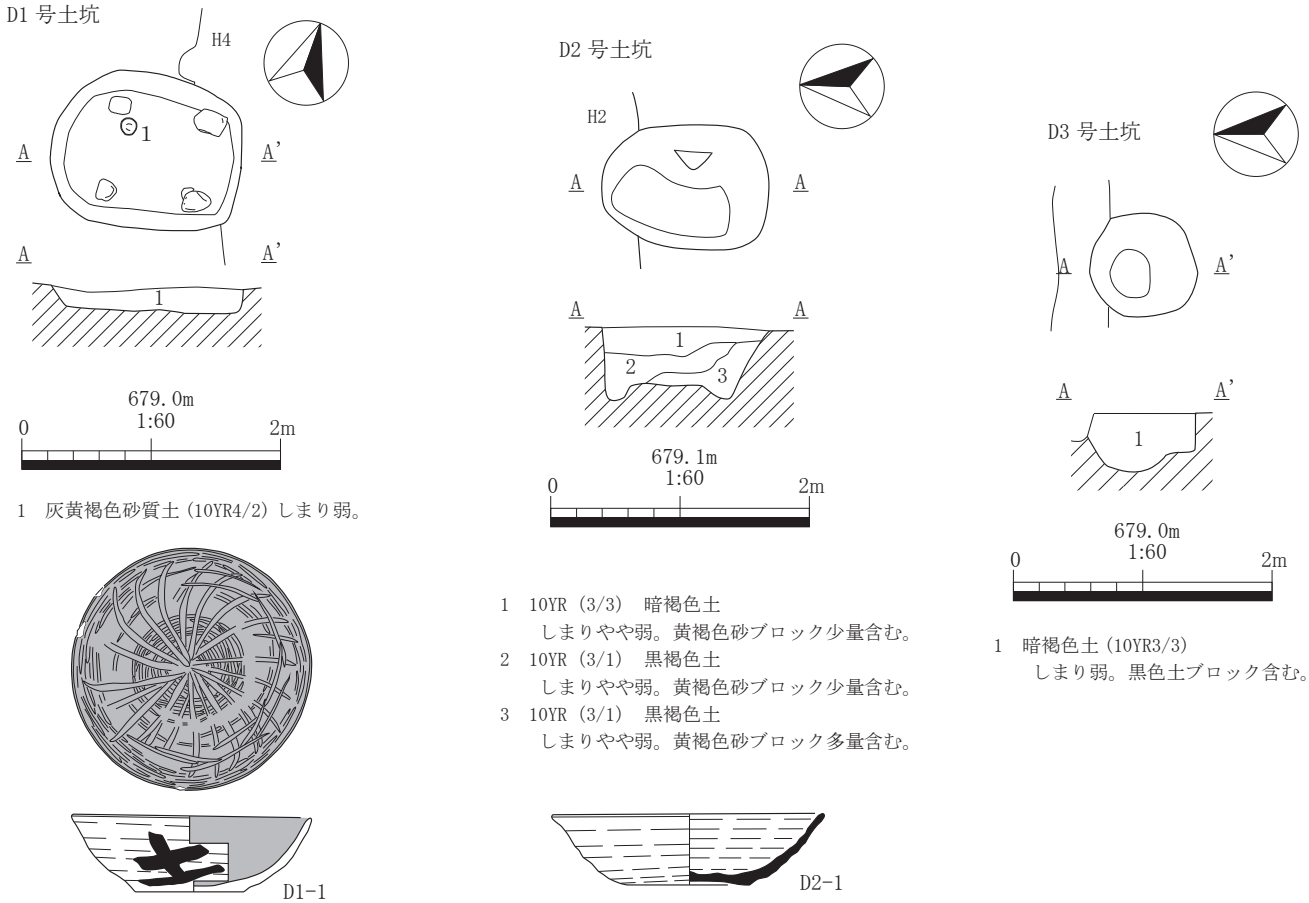
調査区東側に位置し、H2 号住居址より新しい。長軸 1.29m、短軸 0.95m、深さ 0.56m を測り、主軸は W-2°　-N である。平面形は楕円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。

遺物は 1 の須恵器坏が出土した。H2 号住居との新旧関係から、9 世紀以降の所産と考えられる。

D3 号土坑（第 18 図）

調査区東側に位置し、北側を攪乱により破壊される。長軸 0.83m、短軸 0.80m、深さ 0.44m を測る。平面形は円形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。

遺物は出土しなかった。



第 18 図　D1 号・D2 号・D3 号土坑遺構図・遺物図

M1 号溝址（第 19 図）

調査区南東に位置し、調査区東端から始まり南西に向かってわずかに蛇行しながら調査区外へ伸びる。東端部からは湧水が認められる。検出した部分は、長さ 17.84m、幅 3.66m、深さ 0.60m を測り、主軸は N-62°　-E である。断面形は垂直に立上るところと緩やかに立上るところがある。第Ⅱ章第 3 節で述べたとおり本調査区全体が削平されていると考えられるため、本址もさらに東側に伸びていた可能性がある。

遺物は 1 ～ 4 が土師器の坏、5 は土師器の椀、6 が須恵器の坏、7 が灰釉陶器の皿である。土師器は 3・5 は内面黒色処理が施され、1・3・4・5 には墨書が認められる。

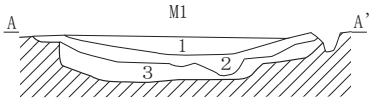
出土遺物から 9 世紀以降の所産と考えられる。

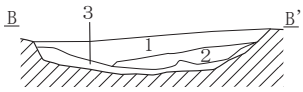
M2 号溝址（第 19 図）

調査区南東端に位置し、東西及び南側が調査区外に伸びる。検出部分は長さ 4.70m、幅 2.44m、深さ 0.61m を測り、主軸は N-73°　-E である。平面形は不定形で、断面形は緩やかに立上る。断面形状や埋土の状況が M1 号溝址と似ているため、溝址と判断した。遺物は出土していない。

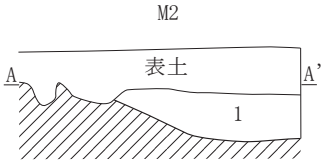
遺構外出土遺物（第 19 図）

遺構外では、耕作に伴う畝上のカクランから遺物が出土した。ここでは 3 点を図化した。1 は土師器の坏と考えられ、内面黒色処理が施される。外面には墨書が認められる。2 は白磁の碗と考えられる。3 は器種不明の鉄製品である。



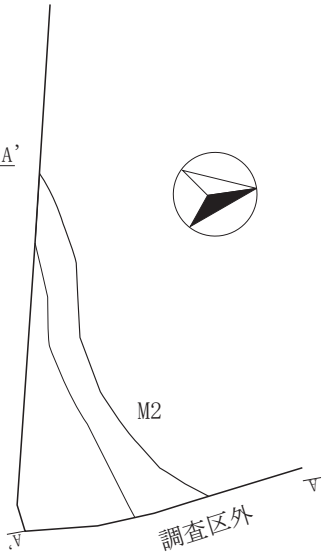


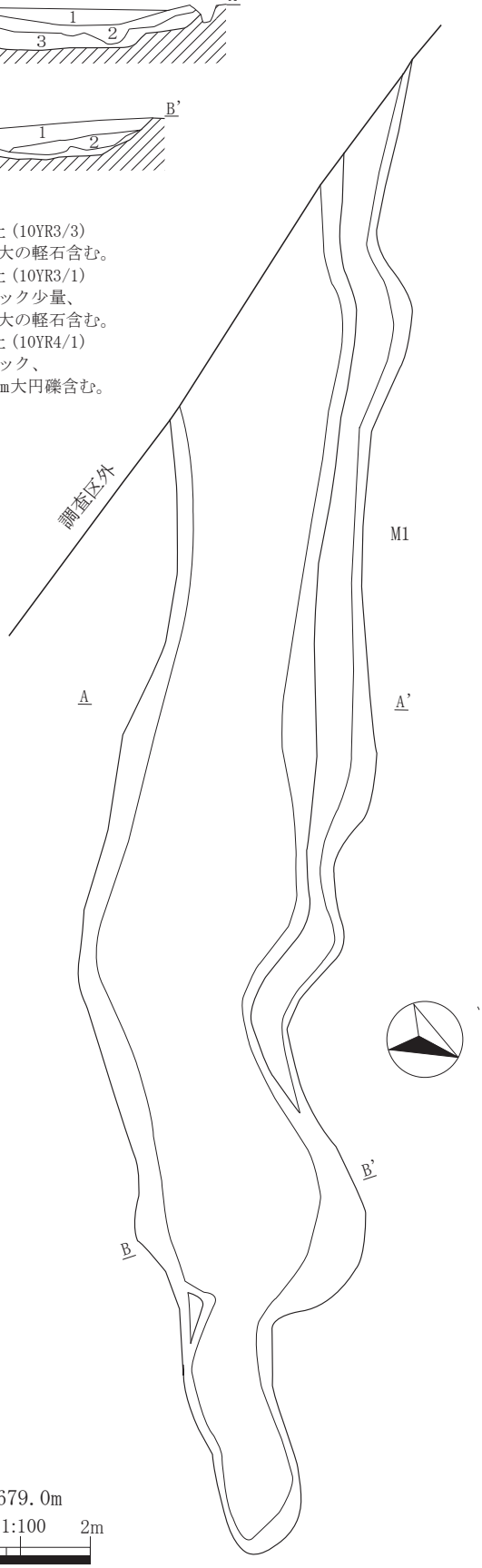
1　暗褐色土（10YR3/3）
　　φ１cm大の軽石含む。
2　黒褐色土（10YR3/1）
　　砂ブロック少量、
　　φ１cm大の軽石含む。
3　褐灰色土（10YR4/1）
　　砂ブロック、
　　φ１０cm大円礫含む。



1　灰黄褐色土（10YR4/2）
　　黄褐色砂ブロック含む。

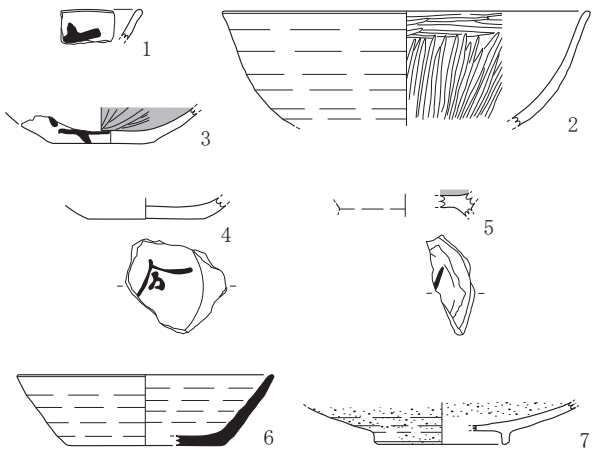
679.0m
0　1:100　2m



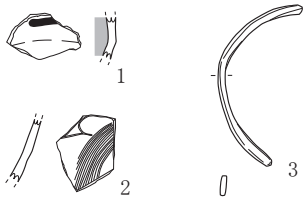


679.0m
0　1:100　2m

M1 号溝址出土遺物



遺構外出土遺物



第 19 図　M1 号・M2 号溝址遺構図・遺物図、遺構外出土遺物図

遺構	番号	器種	器形	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
H1	1	土師器	坏	13.0	6.4	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	2	土師器	坏	(12.0)	(5.6)	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切	回転実測
H1	3	土師器	坏	(11.8)	(4.8)	4.3	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切→外周ヘラケズリ	回転実測
H1	4	土師器	坏	(13.2)	(5.8)	4.7	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	5	土師器	坏	12.6	5.7	4.8	ミガキ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	6	土師器	坏	(14.3)	6.2	4.1	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切口縁下部ヘラケズリ	完全実測　墨書
H1	7	土師器	坏	(17.0)	(7.2)	5.0	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切	回転実測　墨書
H1	8	土師器	坏	14.0	6.8	4.1	ミガキ→暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測　墨書　杓状坏
H1	9	土師器	坏	(14.2)	—	〈3.4〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H1	10	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	11	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	12	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	13	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	口縁部ヘラケズリ・底部糸切	破片実測　墨書
H1	14	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	15	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	16	土師器	坏	—	—	—	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H1	17	土師器	坏	—	(6.6)	〈1.4〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測　墨書
H1	18	土師器	坏	—	(7.4)	〈3.2〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部回転糸切	回転実測　墨書
H1	19	土師器	椀	—	—	〈1.6〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H1	20	土師器	椀	—	(7.2)	〈2.0〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部糸切→高台貼付	回転実測　墨書
H1	21	土師器	皿	(12.7)	6.8	3.6	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部切り離し→高台貼り付け	完全実測
H1	22	土師器	皿	(13.3)	6.2	3.1	ミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測
H1	23	須恵器	蓋	(10.2)	—	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測
H1	24	須恵器	蓋	(14.2)	(3.2)	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ→天井部回転ヘラケズリ→つまみ貼付	回転実測自然釉付着・火だすき有
H1	25	須恵器	坏	14.2	6.2	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	26	須恵器	坏	13.1	6.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	27	須恵器	坏	(13.0)	6.1	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	回転実測
H1	28	須恵器	坏	(13.3)	(6.8)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測　墨書
H1	29	須恵器	坏	13.5	6.7	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測
H1	30	須恵器	坏	(13.7)	5.9	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ→底部回転糸切	完全実測　歪みあり
H1	31	土師器	鉢	—	(9.5)	〈6.2〉	ミガキ→黒色処理	ロクロナデ→底部と底部外周ヘラケズリ	回転実測　墨書
H1	32	土師器	甕	—	8.2	〈8.0〉	ロクロナデ	ロクロナデ→底部と底部外周ヘラケズリ	ロクロ甕　完全実測
H1	33	土師器	甕	(9.1)	(5.6)	12.0	口縁ヨコナデ→胴下部ヘラナデ	口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ	完全実測
H2	1	土師器	坏	(16.6)	(8.0)	4.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切・すす付着	回転実測　墨書
H2	2	須恵器	坏	13.5	5.8	3.9	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切　火だすき痕	完全実測
H2	3	須恵器	坏	13.2	6.8	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測
H2	4	須恵器	坏	13.8	6.8	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測
H2	5	須恵器	坏	(14.8)	(7.2)	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ→回転糸切	回転実測
H2	6	土師器	鉢	(13.8)	—	〈5.1〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・すす付着	7と同一個体か
H2	7	土師器	鉢	—	(7.0)	〈5.9〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切　底部ヘラケズリ・すす付着	6と同一個体か
H2	8	土師器	鉢	19.0	—	〈9.6〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測
H3	1	土師器	坏	13.7	5.3	3.9	ヘラミガキ・暗文　黒色処理	ロクロナデ・下部ヘラナデ・底部ヘラケズリ・焼成後１穿孔	完全実測
H3	2	土師器	坏	13.1	6.0	3.9	ヘラミガキ・暗文　黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切	完全実測
H3	3	土師器	坏	(12.6)	4.9	4.1	ヘラミガキ・暗文　黒色処理	ロクロナデ・ヘラナデ・黒色処理・底部回転糸切	完全実測
H3	4	土師器	坏	—	5.6	〈2.6〉	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切(左)	完全実測　墨書
H3	5	灰釉陶器	椀	(15.4)	(6.6)	4.8	ロクロナデみこみ部磨耗　灰釉ハケぬり	ロクロナデ　灰釉ハケぬり	回転実測
H3	6	土師器	甕	(25.8)	—	〈13.1〉	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	回転実測
H3	7	土師器	甕	13.5	9.1	17.2	カキ目．ロクロナデ	カキ目・口縁ヨコナデ・ 下部ナデからのヘラケズリ・底部静止糸切	ロクロ小型甕　完全実測
H3	8	土師器	甕	—	4.2	15.6	ハケナデ	胴部・底部　ヘラケズリ	回転実測
H4	1	土師器	坏	(13.3)	5.8	4.7	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部右回転糸切	完全実測　墨書
H4	2	土師器	坏	(13.6)	(6.6)	(4.1)	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切	回転実測
H4	3	土師器	坏	(14.0)	(5.8)	4.1	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ　底部右回転糸切	回転実測　墨書
H4	4	土師器	坏	12.9	6.2	3.7	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ・底部右回転糸切	完全実測　墨書
H4	5	土師器	坏	(14.0)	(6.6)	3.8	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ　・底部回転糸切	回転実測
H4	6	土師器	坏	13.8	5.3	3.8	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ・底部右回転糸切	完全実測　墨書
H4	7	土師器	坏	(16.0)	(5.4)	(4.9)	ヘラミガキ	ロクロナデ・底部右回転糸切	回転実測
H4	8	土師器	坏	14.9	—	〈3.7〉	ヘラミガキ　暗文　黒色処理	ロクロナデ	完全実測
H4	9	土師器	坏	—	(6.6)	〈1.3〉	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ・底部回転糸切	回転実測　墨書
H4	10	土師器	椀	(15.2)	(7.6)	6.1	ヘラミガキ　暗文　黒色処理	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ→高台貼付	完全実測
H4	11	土師器	皿	(13.3)	7.0	3.2	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　高台貼付	完全実測
H4	12	土師器	皿	(12.6)	6.5	3.8	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部回転糸切→高台貼付	完全実測　墨書

第１表　遺物観察表１

遺構	番号	器種	器形	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
H4	13	土師器	椀	—	7.5	〈2.1〉	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部高台貼付	完全実測　墨書
H4	14	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H4	15	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H4	16	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ 黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H4	17	土師器	鉢	—	—	—	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H4	18	須恵器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測　墨書
H4	19	灰釉陶器	皿	(18.4)	—	〈2.4〉	ロクロナデ　施釉	ロクロナデ　施釉	回転実測
H4	20	土師器	甕	(16.4)	(8.6)	20.5	ロクロナデ	ロクロナデ・体部下端ヘラケズリ	回転実測
H4	21	須恵器	甕	—	4.3	〈5.6〉	ロクロナデ	ロクロナデ・底部右回転糸切	ロクロ小型甕　完全実測
H5	1	土師器	坏	(14.2)	—	〈3.0〉	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	2	土師器	坏	12.9	5.8	4.5	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部～下部ヘラケズリ	完全実測　墨書
H5	3	土師器	坏	(12.4)	5.9	〈4.2〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部ヘラケズリ	完全実測　墨書
H5	4	土師器	坏	(13.6)	—	4.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切	回転実測
H5	5	土師器	坏	(14.0)	(5.8)	4.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　糸切→ヘラケズリ	回転実測　墨書
H5	6	土師器	坏	—	(5.8)	〈2.8〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切	回転実測　墨書
H5	7	土師器	坏	(13.0)	—	〈2.6〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	8	土師器	坏	(12.5)	5.5	3.6	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　切り離し後ヘラケズリ	完全実測　墨書
H5	9	土師器	坏	(13.3)	5.1	3.9	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部～下部ヘラケズリ	完全実測　墨書
H5	10	土師器	坏	(13.9)	6.1	3.8	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測　墨書
H5	11	土師器	坏	(14.6)	—	〈3.1〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・下部ヘラケズリ	回転実測　墨書
H5	12	土師器	坏	13.6	5.7	3.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測　墨書
H5	13	土師器	坏	(13.0)	—	〈3.4〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	14	土師器	坏	(14.2)	—	〈4.5〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	15	土師器	坏	(15.8)	—	〈4.1〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	16	土師器	椀	(14.3)	—	〈5.0〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・高台欠損	完全実測
H5	17	土師器	椀	15.8	7.1	5.4	ヘラミガキ・暗文→黒色処理	ロクロナデ→右回転糸切→高台貼付	完全実測
H5	18	土師器	椀	16.8	7.3	7.2	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→転糸切→高台貼付	完全実測　墨書
H5	19	土師器	皿	(12.7)	6.3	3.3	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切→高台貼付	完全実測
H5	20	土師器	皿	(13.4)	5.5	3.1	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・底部切り離し後高台貼付	完全実測
H5	21	土師器	皿	12.8	6.0	3.2	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切→高台貼付 ヘラミガキ→黒色処理	完全実測
H5	22	土師器	皿	(14.4)	7.2	3.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　ヘラミガキ	完全実測
H5	23	土師器	皿	13.0	6.6	2.6	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切→高台貼付	完全実測　墨書
H5	24	土師器	皿	13.5	5.2	3.0	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切→高台貼付	完全実測　墨書
H5	25	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	26	土師器	皿	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	27	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	28	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	29	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	30	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H5	31	土師器	皿	(14.0)	—	〈1.1〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	32	土師器	皿	12.7	6.9	3.5	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラミガキ　回転ヘラケズリ　回転糸切	完全実測　墨書
H5	33	須恵器	坏	(13.2)	—	〈3.1〉	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測　墨書
H5	34	須恵器	坏	13.5	6.4	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測
H5	35	須恵器	坏	12.9	6.2	4.0	ロクロナデ→黒色処理か　わずかにミガキ	ロクロナデ→右回転糸切	完全実測
H5	36	須恵器	有台坏	—	7.8	〈3.1〉	ロクロナデ	ロクロナデ→回転ヘラ切り→高台貼付	完全実測
H5	37	灰釉陶器	椀	(11.0)	—	〈2.4〉	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	回転実測
H5	38	土師器	甕	(12.8)	—	〈5.0〉	ナデ	ヘラケズリ	回転実測
H5	39	土師器	甕	(13.6)	—	〈5.3〉	ハケナデ	ハケナデ	完全実測
H5	40	土師器	甕	(19.6)	—	〈11.1〉	ナデ	ヘラケズリ	回転実測
H6	5	須恵器	坏	13・2	6.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ　底部回転糸切	完全実測　杓状坏
H6	6	須恵器	坏	13.1	5.9	3.6	ロクロナデ　火だすき跡	ロクロナデ・火だすき跡　底部回転糸切（左）	完全実測
H6	7	須恵器	坏	13.6	6.3	3.7	ロクロナデ　火だすき跡	ロクロナデ・火だすき跡　底部回転糸切（左）	完全実測
H6	8	須恵器	坏	13.9	6.6	3.8	ロクロナデ　火だすき跡	ロクロナデ・火だすき跡　底部回転糸切（左）	完全実測
H6	4	土師器	皿	13.8	6.7	3.7	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・高台貼付	完全実測　墨書
H6	2	土師器	坏				ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
H6	3	土師器	坏				ヘラミガキ	ロクロナデ・底部回転糸切	破片実測　墨書
H6	1	土師器	坏	16.5	7.7	5.7	ヘラミガキ・暗文　黒色処理	ロクロナデ　底部ヘラケズリ	完全実測
H6	9	土師器	甕	(22.0)	—	〈8.2〉	口縁ヨコナデ　ヘラナデ	口縁ヨコナデ　ヘラケズリ	武蔵甕　回転実測
H7	1	土師器	坏	(14.0)	5.9	4.1	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部ヘラケズリ	完全実測　墨書

第２表　遺物観察表２

遺構	番号	器種	器形	法量（cm）			成形・調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
H7	2	土師器	坏	(14.0)	6.7	4.4	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ　底部糸切→ヘラケズリ	完全実測　墨書
H7	3	土師器	坏	(16.4)	(8.0)	5.8	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　底部ヘラケズリ	回転実測
H7	4	土師器	坏	(16.2)	6.1	4.8	ヘラミガキ　暗文　黒色処理	ロクロナデ　底部ヘラケズリ	完全実測
H7	5	土師器	坏	—	5.8	〈1.4〉	ロクロナデ	ロクロナデ　底部右回転糸切	完全実測
H7	6	土師器	蓋	—	—	〈2.6〉	ヘラミガキ　黒色処理	ロクロナデ　天井部回転ヘラケズリ	回転実測
H7	7	須恵器	坏	(13.2)	(6.2)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ　底部回転糸切	回転実測
H7	8	須恵器	坏	13.3	5.9	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ　底部右回転糸切	完全実測　墨書
H7	9	須恵器	坏	(13.4)	6.2	3.9	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ　火だすき痕　底部回転糸切	完全実測
H7	10	須恵器	坏	14.2	6.0	3.9	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ　火だすき痕　底部右回転糸切	完全実測
H7	11	須恵器	坏	13.4	6.6	3.7	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ　火だすき痕　底部右回転糸切	完全実測
H7	12	須恵器	坏	(13.6)	(7.6)	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ　底部右回転糸切	回転実測
H7	13	須恵器	坏	(14.0)	6.7	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ　底部右回転糸切	完全実測
H7	14	須恵器	坏	14.3	6.9	4.2	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ　火だすき痕　底部右回転糸切	完全実測
H7	15	須恵器	坏	(15.4)	(8.0)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ　底部右回転糸切	回転実測
H7	16	須恵器	有台坏	—	7.9	〈1.9〉	ロクロナデ	ロクロナデ　底部糸切　高台貼付	完全実測
H7	17	土師器	甕	10.9	—	〈8.1〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測
H7	18	土師器	甕	(14.0)	—	〈7.4〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測
H7	19	土師器	甕	(20.8)	—	〈6.1〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測
H7	20	土師器	甕	—	4.4	〈6.6〉	ヘラナデ	ヘラケズリ	完全実測
H7	21	須恵器	壷	(13.2)	—	〈8.9〉	ロクロナデ　自然釉付着	ロクロナデ　自然釉付着	回転実測
H7	22	須恵器	壷	—	(10.6)	〈6.3〉	ロクロナデ	ロクロナデ　高台貼付	回転実測
H7	23	須恵器	甕	(26.0)	(14.0)	〈20.3〉	ロクロナデ　ヘラナデ　自然釉付着	ロクロナデ・自然釉付着　体部下端ヘラケズリ	回転実測
D1	1	土師器	坏	12.4	5.6	4.0	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ→回転糸切（左）　底部に火だすき痕	完全実測
D2	1	須恵器	坏	14.1	6.1	3.7	ロクロナデ　火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切　火だすき痕	完全実測
M1	1	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
M1	2	土師器	坏	(19.2)	—	〈6.0〉	ヘラミガキ・黒色処理	ロクロナデ	回転墨書
M1	3	土師器	坏	—	(5.6)	〈1.9〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・底部回転糸切	回転実測　墨書
M1	4	土師器	坏	—	(6.0)	〈1.1〉	ロクロナデ	ロクロナデ　底部回転糸切	回転墨書
M1	5	土師器	椀	—	—	〈1.2〉	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転墨書　墨書
M1	6	須恵器	坏	(13.4)	(8.2)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ　底部回転糸切	回転実測
M1	7	灰釉陶器	皿	—	(7.0)	〈2.2〉	ロクロナデ・施釉	ロクロナデ・施釉	回転実測
外	1	土師器	坏	—	—	—	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	破片実測　墨書
外	2	白磁	椀	—	—	—	施釉	施釉	破片実測

第３表　遺物観察表３

遺構	番号	器種	器形	法量（cm）			調整・使用痕等	備考
				長さ	幅	厚さ		
H1	34	石器	磨敲石	10.3	5.0	3.0	すり面１　上下端部に敲打痕	
H1	35	石器	砥石	〈15.5〉	〈7.8〉	〈7.1〉	上下欠損　砥面数4。右側に条痕	
H1	36	鉄製品	刀子	〈14.9〉	1.3	0.5		茎部欠損
H1	37	鉄製品	鑷子	〈9.0〉	〈0.7〉	〈0.3〉		約1/2欠損
H1	38	鉄製品	鑷子	〈6.2〉	〈0.7〉	〈0.3〉		約1/2欠損
H2	9	石器	磨石	17.0	7.1	4.9	すり面2	
H2	10	石器	不明	16.3	5.2	3.5		
H4	22	鉄製品	角釘	〈5.0〉	〈0.4〉	〈0.4〉		先端欠損
H5	41	石器	砥石	24.1	〈12.0〉	〈6.8〉	凹径　2.0　凹深　0.9 砥面数４　正裏・右側に条痕　正面に凹と敲打痕	右側欠損
H5	42	石器	磨石	〈7.5〉	〈9.0〉	〈3.6〉	すり面１	上下欠損
H5	43	石器	磨石	〈10.3〉	〈10.5〉	〈5.3〉	すり面１	下部欠損
H5	44	鉄製品	刀子	〈6.3〉	〈0.8〉	〈0.3〉		茎部
H5	45	鉄製品	刀子	〈5.0〉	〈1.7〉	〈0.4〉		両端欠損
H6	10	石器	石鏃	〈1.85〉	1.5	0.4		黒曜石・脚部先端欠損
H6	11	鉄製品	刀子	〈8.8〉	〈1.2〉	〈0.3〉		茎部欠損
H6	12	鉄製品	不明	〈2.5〉	〈0.5〉	〈6.0〉		両端欠損
H6	13	鉄製品	角軸	〈10.6〉	〈6.0〉	〈6.0〉		両端欠損
H6	14	鉄製品	角釘	〈5.1〉	〈5.0〉	〈5.0〉		両端欠損
H6	15	鉄製品	角軸	〈4.2〉	〈0.5〉	〈0.7〉		両端欠損　折れ
H7	24	石器	磨敲石	14.5	5.7	3.8	すり面1　両端・側面に敲打痕	
H7	25	鉄製品	刀子	10.7	1.3	0.4		完形
H7	26	鉄製品	鎌	〈13.9〉	3.3	0.4		刃先欠損
外	3	鉄製品	不明	8.4	1.0	0.3		欠損か

第４表　遺物観察表４

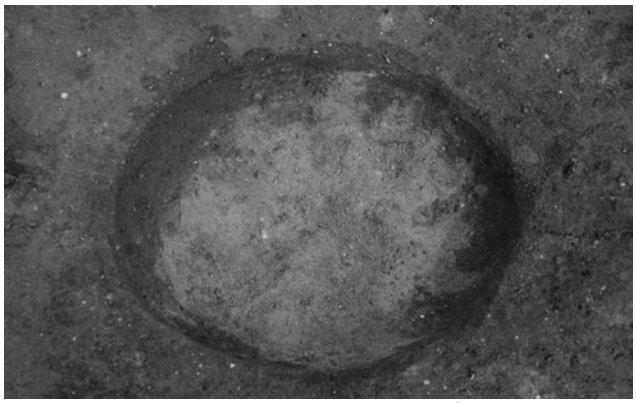
調査区西側完掘状況（東から）

調査区東側完掘状況（東から）

H1 号住居址完掘状況（南から）

H1 号住居址カマド完掘状況（南から）

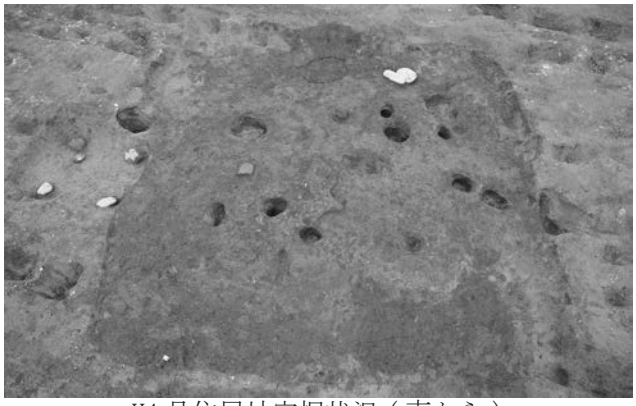
H1 号住居址内土坑検出状況（南から）


H1 号住居址内土坑完掘状況（南から）

H2 号住居址完掘状況（南から）

H3 号住居址完掘状況（南から）

H3 号住居址カマド完掘状況（南から）


H4 号住居址完掘状況（南から）

H5 号住居址完掘状況（南から）

H5 号住居址カマド周辺完掘状況（南から）

H5 号住居址柱穴（P2）完掘状況（南から）

H6 号住居址完掘状況（南から）

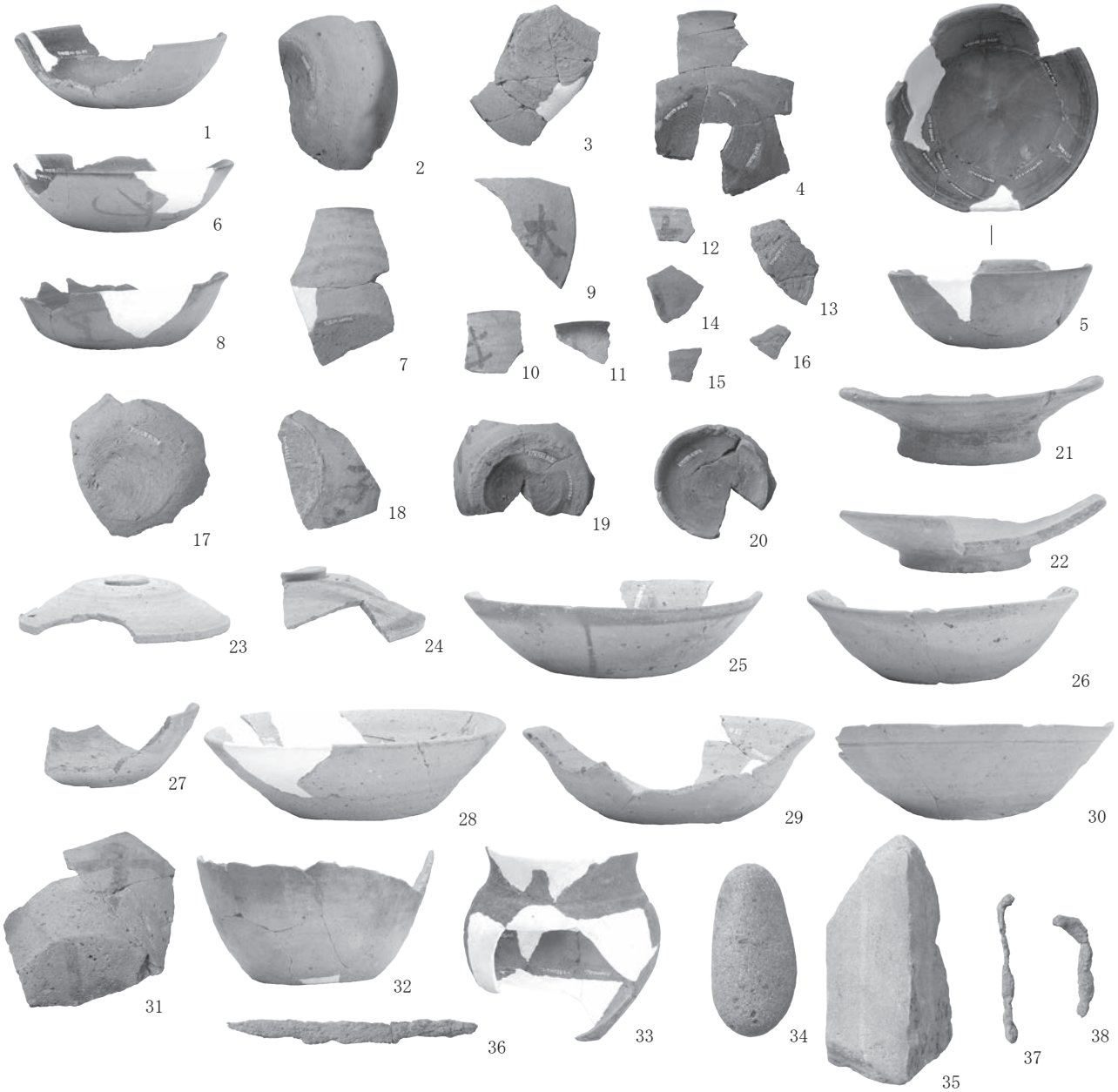
H6 号住居址掘方完掘状況（南から）

H7 号住居址完掘状況（南から）

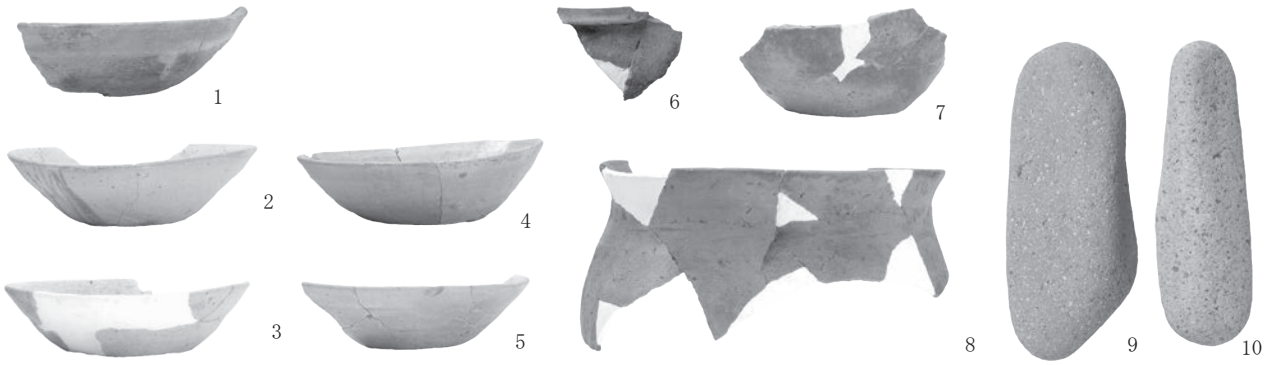
D1 号土坑完掘状況（北から）

M1 号溝址完掘状況（北東から）

H1 号住居址出土遺物

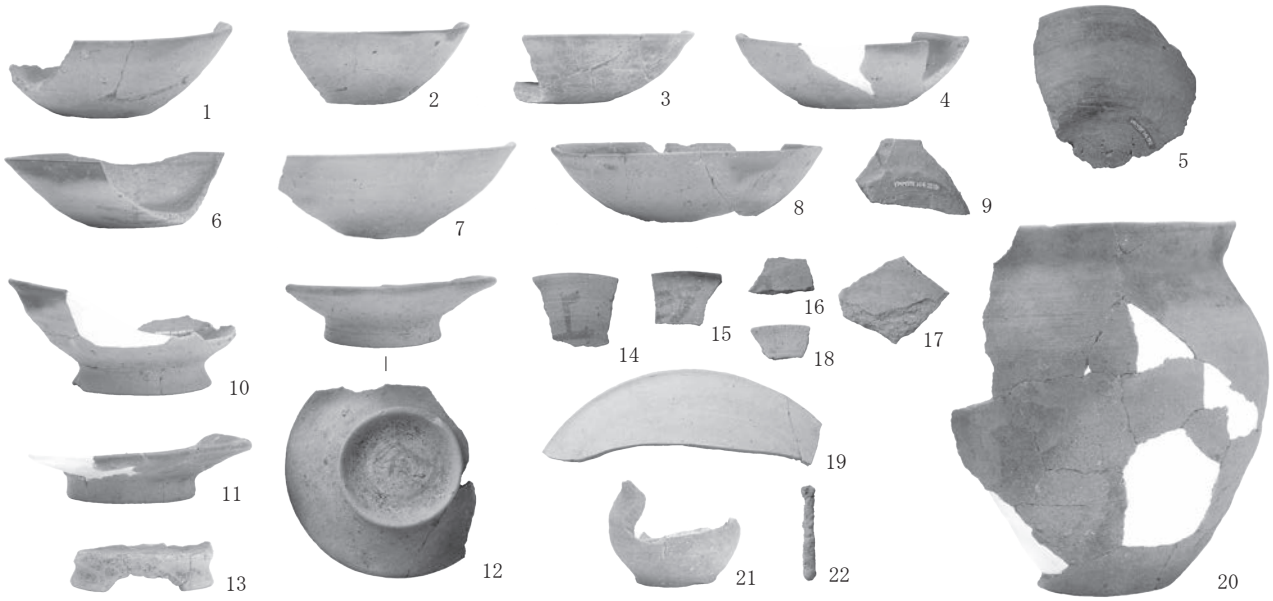


H2 号住居址出土遺物



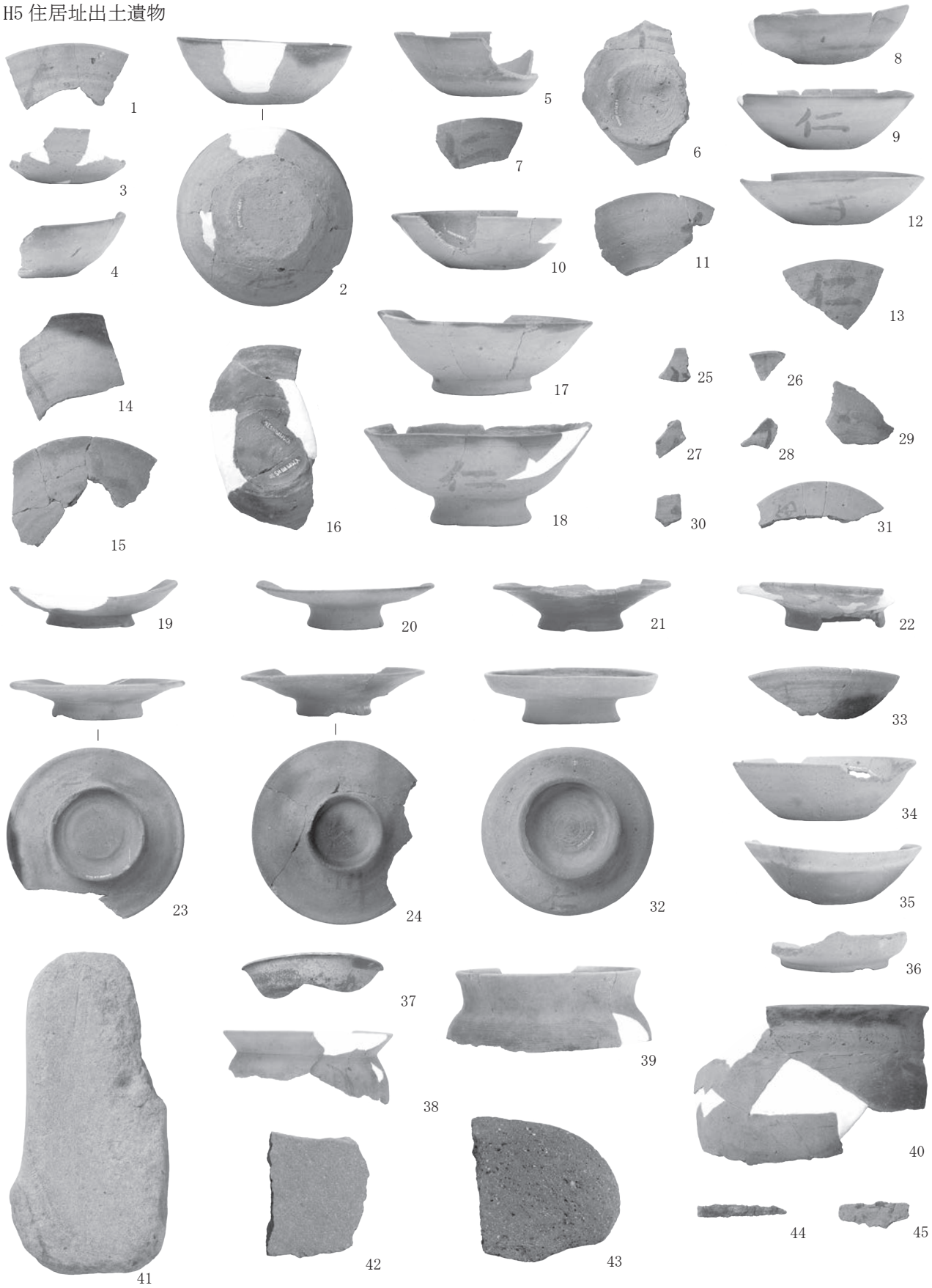
H3 号住居址出土遺物

H4 号住居址出土遺物

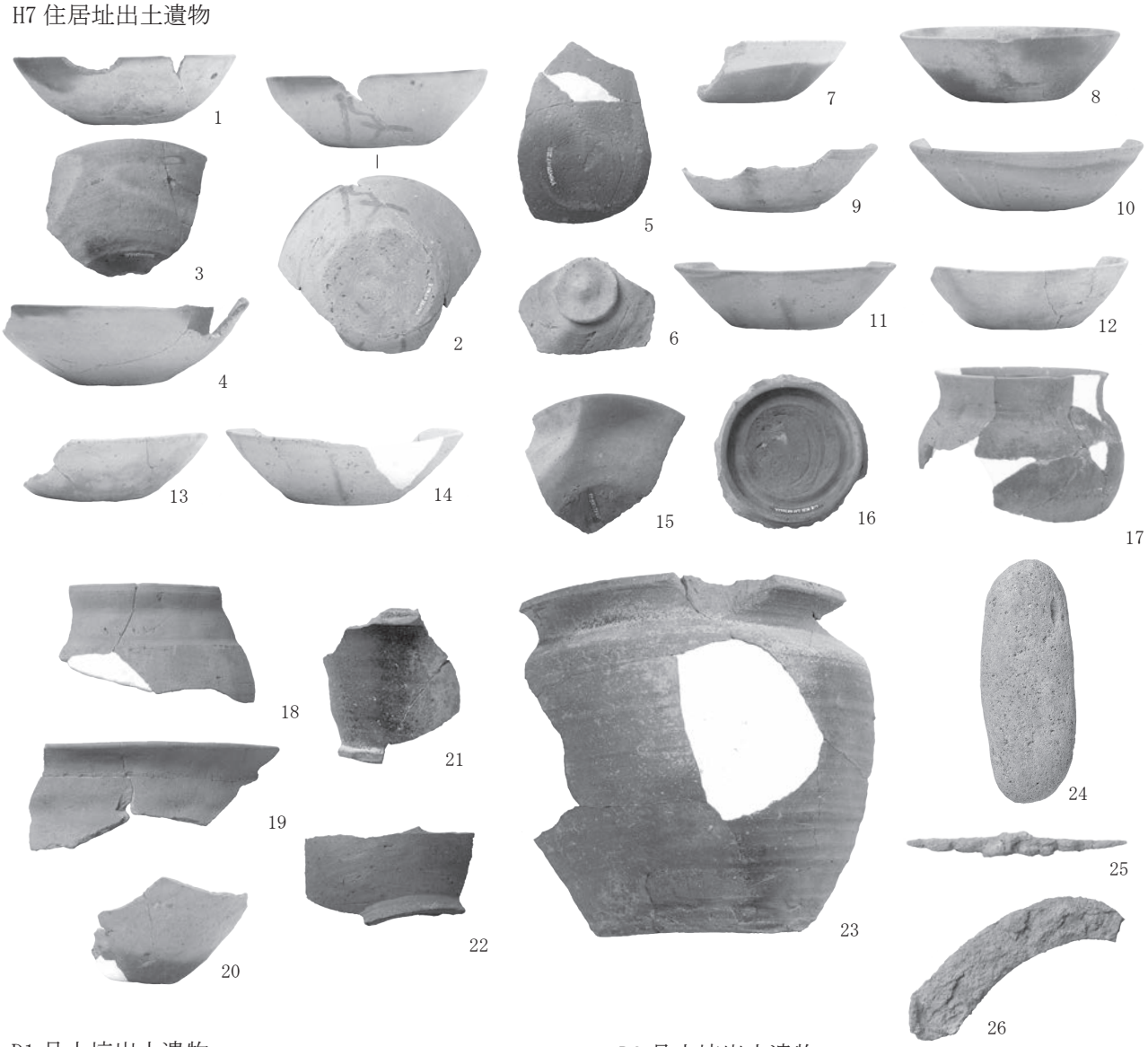


H6 号住居址出土遺物

H5 住居址出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

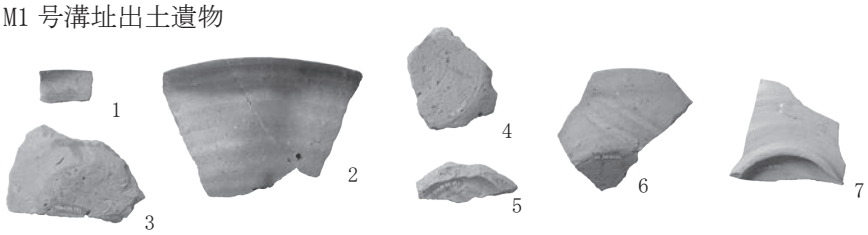
H7 住居址出土遺物



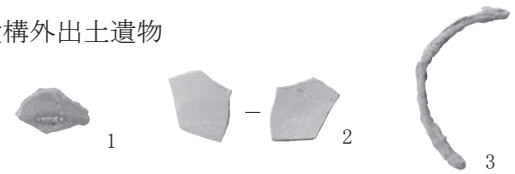
D1 号土坑出土遺物

D2 号土坑出土遺物

M1 号溝址出土遺物



遺構外出土遺物



報告書抄録

ふ り が な	みやのうえいせきぐん　みやのうえいせきなな
書　　名	宮の上遺跡群　宮の上遺跡Ⅶ
シ リ ー ズ 名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第276集
編 著 者 名	久保　浩一郎
編 集 機 関	佐久市教育委員会　文化振興課
所　在　地	長野県佐久市中込2913　Tel:0267-63-5321　Fax:0267-63-5322
発 行 年 月 日	令和3年(2021)　3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやのうえいせきぐん みやのうえいせきなな 宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ	さくしみかわだ 佐久市三河田 320-1	20217	240	36° 15′ 17″	138° 27′ 22″	20190819 ～ 20190925	790.2	工場 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮の上遺跡群 宮の上遺跡Ⅶ	集落址	平安時代	竪穴住居址　7軒 掘立柱建物址　1棟 土坑　3基 溝址　2条 ピット　2基	土師器、須恵器、灰釉陶器、白磁、石器、石製品、鉄製品	

要　　約	佐久市北部の湯川左岸台地上に立地する平安時代の集落址である。9世紀後半を主体とする竪穴住居址7軒のほか、円礫と墨書土師器が据えられた土坑などが検出された。また、住居址からは「仁」「令」「寸」などが墨書された土師器が出土した。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第276集
宮の上遺跡群　宮の上遺跡Ⅶ

令和3年(2021)　3月
編集・発行　佐久市教育委員会事務局
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
Tel:0267-63-5321

印刷所　キクハラインク有限会社

'21
第
276
集

宮の上遺跡群　宮の上遺跡Ⅶ

佐久市教育委員会